TERATOTERA DOCUMENT 2016

TERATOTERA DOCUMENT 2016

目次

CONTENTS

CONTENTS 目次 04

ABOUT TERATOTERA TERATOTERA について 06

ARTISTS' POFILE 52 作家プロフィール

SOUTHEAST ASIA PROJECT 50 TERATOSEA

TERATOTERA FESTIVAL 29 TERATOTERA祭り

PREFACE
はじめに
07

SCHEDULE
年間スケジュール
08

SOUND FES.
SOUND FES.
10

ART ON LIVING
暮らすアート
18

NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL
西荻映像祭
24

SUMMARY OF QUESTIONNAIRE
56
アンケート集計

TERAKKO'S VOICE
58
TERAKKOの感想

INTRODUCTION TO ART PROJECT
60
アートプロジェクトの0123

TERA ENGLISH
62
TERA English

EPILOGUE
65
おわりに

ABOUT TERATOTERA

TERATOTERAについて

TERATOTERA（テラトテラ）は、東京都とアーツカウンシル東京と、吉祥寺に拠点を置いて現在進行形の芸術をフィーチャーしている一般社団法人 Ongoing が協働して、平成 21 年度より JR 中央線高円寺駅〜吉祥寺駅〜国分寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野、多摩地域を舞台に展開する、地域密着型アートプロジェクトおよびその発信機関の総称です。TERATOTERA では、音楽ライブ、展覧会などのアートプログラムを、年間を通して実施しています。また、アートの現場で活躍する人材の育成に重きを置き、アートプログラムの運営をボランティアスタッフが主導すると共に、アート関係者に向けた様々なレクチャーを開講しています。

国分寺 Kokubunji
武蔵小金井 Musashi-Koganei
東小金井 Higashi-Koganei
武蔵境 Musashi-Sakai
三鷹 Mitaka
吉祥寺 Kichijoji
西荻窪 Nishi-Ogikubo
荻窪 Ogikubo
阿佐ヶ谷 Asagaya
高円寺 Koenji

PREFACE

はじめに

本ドキュメントは JR 中央線の高円寺・吉祥寺・国分寺という “3 つの寺 ” を結ぶ周辺地域で展開しているアートプロジェクト TERATOTERA（テラトテラ）の平成 28 年度の活動をまとめたものです。7 年目を迎えた本プロジェクトでは、トーク、ライブ、展覧会、レクチャーなど、場所や内容を変えながら、アートを通した様々なイベントや企画を実施してきました。

本年度は東小金井の高架下を舞台とした音楽・パフォーマンスライブを皮切りに、暮らしとアートをテーマにした武蔵境でのトークイベント、西荻窪では複数店舗を会場とした映像祭、秋には三鷹の街全体を使って大規模展覧会「TERATOTERA 祭り」を開催。こうしたアートイベントと並行して、アーティストやキュレーターに向けた英語のレクチャーや、アートプロジェクトのノウハウを学べる連続講座も開催。また年を跨いで、東南アジアからアーティストを招聘し滞在制作をサポートする新プロジェクト「TERATOSEA（テラトセア）」も始動しました。

TERATOTERA では、企画の草案から運営まで TERAKKO（テラッコ）と呼ばれるボランティアスタッフがその中心的な役割を担っています。今年はこれまで支えてくれている TERAKKO に加えて、新しいメンバーが多数加わり、皆で協働しながら一つ一つの企画を成功へと導いてくれました。今年度の TERATOTERA では、混迷を極める昨今の社会状況の中でアートに何ができるのかを問いかけるような企画が続きましたが、そうした中でも笑顔を絶やさず協力し合いながら生き生きと活動を続ける TERAKKO たちの立ち振る舞いが印象的でした。そこから今後アートプロジェクトが進むべきヒントを沢山もらった気がしています。

本ドキュメントのテキストのほとんどは、TERAKKO たちの言葉によって構成されています。彼らの案内のもと、今年度の TERATOTERA の軌跡をじっくりとご覧いただければと思います。

TERATOTERA ディレクター
小川希

This document is record of the art project, TERATOTERA in 2016, which happened around Koen-ji, Kichijo-ji, and Kokubun-ji on the line of JR Chuo Line (Central Line). “Ji” aka “TERA” stands for a temple in Japanese and “TO” means “and”, thus this project is connecting those three temples and their circumstances. This seven-year old project has welcomed various programs and events on art such as talk shows, gigs, exhibitions, and lectures, changing its contents and places annually.

Starting with the music and performance program’s stage set under the bridge of Higashi Koganei, this year’s gigantic festival was held at Musashi-Sakai, Nishi-Ogikubo and Mitaka. Musashi-Sakai had a talk show regarding the relationship between life and art. There was a film festival at Nishi-Ogikubo using a several shops as a cinema. The entire town of Mitaka was dedicated to this large exhibition festival in autumn. Along with those art events, the festival prepared English language lectures aimed at artists and curators, as well as a series of seminars for start-up art projects. Additionally, 2017 saw the beginning of a new project, TERATOSEA, a so-called residence for artists from South-East Asian countries.

In TERATOTERA, volunteer staff named TERAKKO (meaning the children of a temple) shoulder the central roles, from planning to management, which allow for this whole project to happen. The number of them increased this year by opening the door to new members; all of whom led this project to success by working together. TERAKKO impressed me with their energetic cooperation with one another and the way they smiled while approaching an answer to one of the main questions that we had this year while planning, what art can do in such a turbulent society these days. From their attitude, I felt I received many tips as to the what way an art project should progress.

Most of this document is comprised from the words of TERAKKO. I believe their leadership on the trail through this year’s TERATOTERA, as shown in this document, will excite and amaze you.

Director of the Art Project, TERATOTERA
Nozomu Ogawa

年間スケジュール

SCHEDULE 2016

JUL. 07 -
TERA ENGLISH

TERA English

■ 日時
初級クラス（隔週水曜日 全 15 回）
2016 年 7 月 13 日（水）～ 2017 年 3 月 8 日（水）
中級クラス（隔週水曜日 全 15 回）
2016 年 7 月 20 日（水）～ 2017 年 3 月 1 日（水）
上級クラス（隔週木曜日 全 15 回）
2016 年 7 月 7 日（木）～ 2017 年 1 月 26 日（木）
■ 会場
アーツカウンシル東京 ROOM302
■ 講師
弘川有希絵、本村桜アリス

JUL. 08 -
INTRODUCTION TO ART PROJECT

アートプロジェクトの0123（オイッチニーサン）

■ 日時（原則隔週金曜日 全 17 回）
2016 年 7 月 8 日（金）～ 2017 年 3 月 3 日（金）20:00 ～ 22:00
■ 会場
吉祥寺 グランキオスク
■ コーディネーター
小川希
■ ゲスト
遠藤一郎、小鷹拓郎、松本哉、福住廉、服部浩之、芹沢高志、佐脇三乃里

AUG. 20 - 21
TERATOTERA SOUND FES.

TERATOTERA SOUND FES. –ヒガコ、高架下の夕立ち–

■ 日時
2016 年 8 月 20 日（土）、21 日（日）16:00 ～ 18:00
■ 会場
コミュニティステーション東小金井
■ 参加アーティスト
8 月 20 日（土）Aokid、センチメンタル岡田、ラッキーオールドサン
8 月 21 日（日）Aokid、宇治野宗輝、川村美紀子 × HIKO

AUG. 26
ART ON LIVING

暮らすアート
■ 日時
2016 年 8 月 26 日（金）19:30 ～ 21:30
■ 会場
flower cafe コリウス武蔵境
■ ゲスト
いちむらみさこ、奥山理子、米田年範

SEP. 09 - 11
NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL

西荻映像祭 2016 –あなたとわたしの間のこと–
■ 日時
2016 年 9 月 9 日（金）、10 日（土）、11 日（日）17:00 ～ 22:00
■ 会場
ビリヤード山崎、旅の本屋のまど、フジクリーニング
■ 参加アーティスト
秋山由希、キュンチョメ、林千歩

OCT. 08 - 10
TERATOTERA FESTIVAL 2016 -INVOLVE-

TERATOTERA 祭り 2016 Involve –価値観の異なる他者と生きる術–
■ 日時
2016 年 10 月 8 日（土）9 日（日）、10 日（月・祝）11:00 ～ 19:00
■ 会場
三鷹駅周辺
■ 参加アーティスト

アート展示	淺井裕介、うらあやか、遠藤一郎、利部志穂、河口遥、田中義樹、永畑智大、橋本聡、ハンバーグ隊、東野哲史
ライブ	渋谷サイファー、蜻蛉 -TONBO-、BATIC+ermhoi
パフォーマンス	阿目虎南（大駱駝艦）
トークゲスト	上田紀行

DEC. 13 -
SOUTHEAST ASIA PROJECT

TERATOSEA（テラトセア）
■ 展示（"Brackish Tomorrow"）
2017 年 2 月 1 日（水）～ 5 日（日）12:00 ～ 21:00
■ 滞在
2016 年 12 月 13 日（火）～ 2017 年 2 月 20 日（月）
■ 会場
Art Center Ongoing
■ 参加アーティスト
Thawiphat Praengoen　ターウィーパッ・プレーヌーン
■ トークゲスト
浅見靖仁

TERATOTERA SOUND FES.
- ヒガコ、高架下の夕立ち -

TERATOTERA SOUND FES.
-Summer Shower at Higako, Under the Railroad-

日時：　2016年8月20日（土）、21日（日）16:00～18:00
会場：　コミュニティステーション東小金井（東京都小金井市梶野町5-10-58）
参加アーティスト：8月20日（土）Aokid、センチメンタル岡田、ラッキーオールドサン
8月21日（日）Aokid、川村美紀子 × HIKO、宇治野宗輝

Date :　2016.8.20 (Sat.) 8.21 (Sun.) 16:00～18:00
Venue :　Community Station Higashi-Koganei
(5-10-58 Kajinocho, Koganeishi, Tokyo)
Artist :　8.20 (Sat.) Aokid, Sentimental Okada, Lucky Old Sun
8.21 (Sun.) Aokid, Mikiko Kawamura × HIKO, UJINO

雷雨を呼んだ!? 高架下の熱演

舞台は東小金井駅の高架下にある「コミュニティステーション東小金井」。電車音がBGMとなる空間に、「何かが起こる」と予感させる個性的なアーティスト5組が集結しました。そして、「ヒガコ、高架下の夕立」というサブタイトルそのままに夕立とともに2日間にわたる「TERATOTERA SOUND FES.」が始まりました。
声で、楽器で、そして身体全体から発する音は、夏のように刺激的で、高架下を吹き抜ける風のようにさわやかで懐かしく響きます。そこに雷雨音が加わり、高架下のステージを熱く演出しました。
（伊藤亜紀子）

Conjured a storm?!
A lively performance under a train bridge

The stage was “Community Station Higashi-Koganei,” which stands under the train bridge at Higashi-Koganei station.
The rattle of passing-by trains becomes background music in this place. Five ominous, unique artists rallied there to perform at the two-day event “TERATOTERA SOUND FES.” As its subtitle, “Summer Shower at Higako, Under the Railroad” alluded, they played along with the summer-sunset rain and the noisy chorus of trains.
Through voice, instruments, and their entire bodies, stimulating tones representing summer resonated like a fresh and yet nostalgic wind blowing through the space. The sound of summer-storm rain joined them on their stage, contributing to the ever-furthering excitement of the event.
(Akiko Ito)

夏の夕日が差し込む高架下。家族連れも混じる聴衆の前で、「ラッキーオールドサン」の演奏が始まった。

Aokid

アオキッド

応援したい！ 海パン男子の「告白」

「あなたのことが大好きでーーす !!」。パフォーマー Aokid が叫ぶと、アップテンポの音楽とともに、高架下がプールに変わりました。ブルーシートのプールに飛び込み、泳ぎ、そして、叫ぶ Aokid。無邪気な中学生のような海パン男子の身体が、跳ね、弾ける。
それは、夕立の日に優しい詩を読むような、もしくは、かわいいイラストを見るようなパフォーマンス。友達の告白の場面を思い出させるような愛おしさでした。
「TERATOTERA SOUND FES.」は 2 日間の日程でしたが、Aokid だけは両日登場し、音楽と身体だけで、高架下を別世界に変貌させました。きっと観客も、彼の「告白」を応援したくなったと思います。
（立山周一郎）

センチメンタル岡田

SENTIMENTAL OKADA

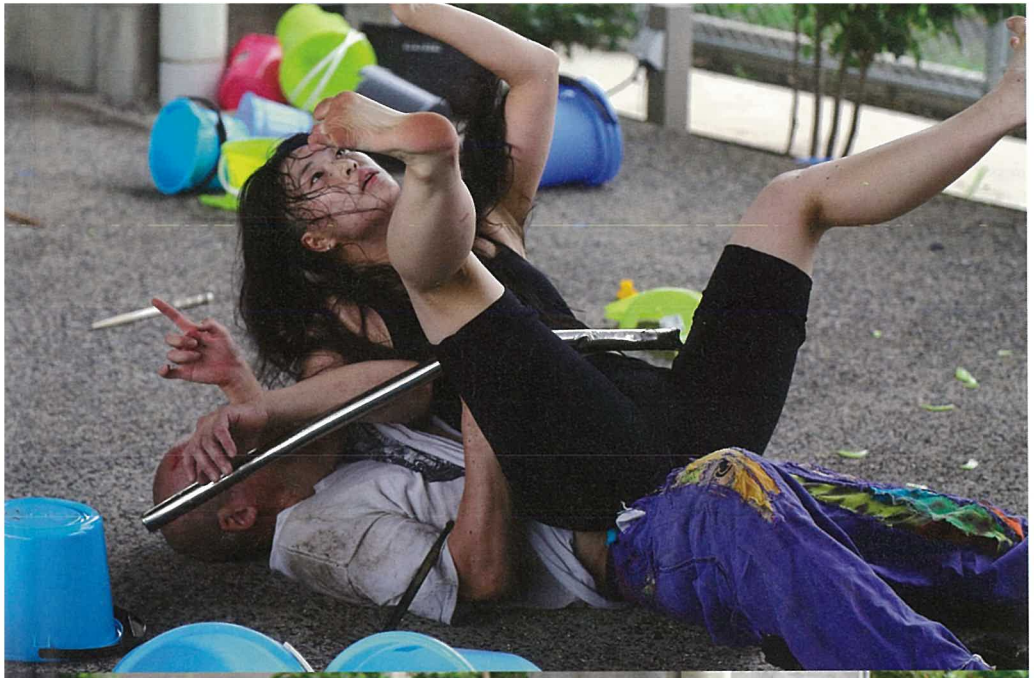
軽やかなピアノに笑えるリリック

センチメンタル岡田は「ピアノが上手い変態」とも称されているとか。事実はともかく、ピアノの旋律は軽やか。思わずくすっと笑ってしまうような独特の歌詞を載せた曲や、演奏が終わった後も耳に残るようなメロディーの曲を次々と奏でていきます。当日はあいにくの雨模様でしたが、即興的に雨をテーマにした曲を演奏するなど、その場の空気や高架下の雰囲気に合わせて、観客を一体化するような空間を作り上げていました。
（清水千恵里）

ラッキーオールドサン
LUCKY OLD SUN

ギターとボーカル 黄昏時の涼風

時刻は 17 時を過ぎ、真夏の大雨が去り、空が夕暮れに染まるころ、「TERATOTERA SOUND FES.」初日のトリを務めるラッキーオールドサンの演奏が始まりました。
ラッキーオールドサンは、ボーカルのナナとギターの篠原良彰のユニット。シンプルな編成で、なにげない日々のなかのドラマを描き出します。その楽曲の世界観が、夕暮れの高架下の空間でくっきりと浮かび上がり、地元の年配の方々にも好評だったようです。彼らがこのイベントで果たした役割は大きかったのではないかと思いました。
個人的には、「魔法のことば」のフレーズ「京王線夏の日」をアドリブで「中央線夏の日」と歌ってもらいたかったなあ、と。
(佐久間考彰)



川村美紀子 × HIKO

MIKIKO KAWAMURA × ヒコ

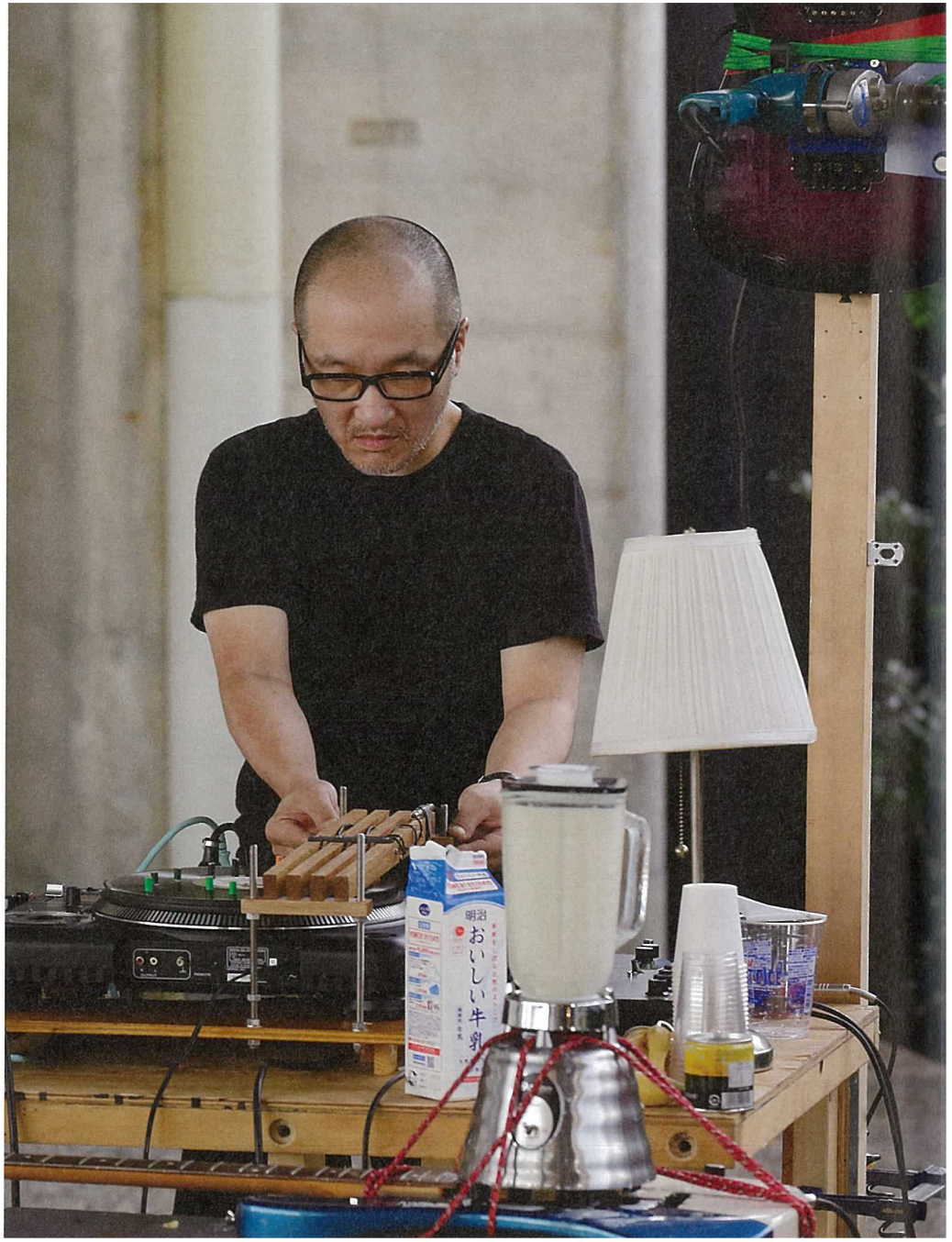
暴力と愛でつながる 異色コラボ

ダンサーの川村美紀子が台車とともに登場し、大量のバケツや灯油タンク、割れたスネアなどを次々とステージに運び込み、ぶちまけました。やがて、手足を縛られたドラマーの HIKO をモノと同様に運び、地面に投げ倒しました。パイプを振り回して HIKO を挑発するように踊る川村。HIKO は身体を捩り悶えながらスティックを手にし、地面に散らばったモノからリズムを生み出す。2 人の並外れた能力と感性が激しく共鳴し、接触し即興で展開していくシーンは、暴力と愛情でつながりあう男女の姿にも見えました。数十人に膨れ上がった観客は息をのんで見つめ、会場は緊張感に満ちました。40 分間のパフォーマンスが終わり拍手が巻き起こる。そのステージ裏で、血だらけの体を寄せ合って笑う２人の晴れやかな表情が、今も忘れられない。

（遠山尚江）

宇治野宗輝

UJINO



楽音＋生活音＝身体に響く爆音

宇治野宗輝は、大量生産された日用品や家電などの既製品を組み合わせる“音の彫刻家”です。DJ 機器やアンプやギターといった定番の音楽装置に、ミキサーや卓上ライト、ドライヤーなどを接続し、楽音と生活音を混ぜて爆音にするパフォーマンスを披露しました。ターンテーブルに合わせて作動するミキサーでバナナシェイクをつくって観客にふるまい、ドリルやギターと合わせて電飾アヒルが光る。音を見て、飲んで、そして聴く。身体のすべてに“響く”作品でした。
（梅澤光由）

暮らすアート

ART on Living

日時：　2016年8月26日（金）19:30～21:30
会場：　flower cafe コリウス武蔵境（東京都武蔵野市境 1-17-6-106）
ゲスト：　いちむらみさこ、奥山理子、米田年範

Date :　2016.8.26 (Fri) 19:30～21:30
Venue :　flower cafe - COLEUS Musashi-Sakai
(#106,1-17-6, Sakai, Musashinoshi,Tokyo)
Guest :　Misako Ichimura, Riko Okuyama, Toshinori Yoneta

見えづらい存在に目を凝らす

夏の暑気が残る金曜日の夜、武蔵境のカフェ「コリウス武蔵境」で暮らしの中にあるアートや表現について語り合うトークイベント「暮らすアート」が開催されました。
ゲストは、ホームレス生活をしながら表現活動を行うアーティストいちむらみさこさん、障害者支援を行う社会福祉法人が運営する「みずのき美術館」（京都府亀岡市）を拠点に様々な活動を行うキュレーター奥山理子さん、そして、アーティストの作品をワンピースとタイツに落とし込むブランドを展開するデザイナー米田年範さんの３人。
分野の垣根を越え、それぞれが考えるアートから紐解かれる話題は、暮らしから2020年の東京オリンピックまで広範囲に及びました。
そこから見えて来たものは、社会で見えづらい、あるいは見えない存在とされてしまいそうな人々をそれぞれの立場から紹介し、広く伝えていくゲストの皆さんの姿でした。
（山上祐介）

Focusing on the invisible existence

On a Friday night amidst the summer's lingering swelter, the "ART on Living," event was held at the café COLEUS Musashi-Sakai in Musashisakai. Its purpose was to discuss art and expression in everyday life.
Three guest speakers attended: Misako Ichimura, Riko Okuyama, and Toshinori Yoneta. Ichimura as an artist expresses herself while living as a homeless person. Okuyama curates a variety of exhibitions based on "Muzunoki Museum (Kameoka, Kyoto)," which originally started as an institution for the disabled. The designer Yoneta is running a clothing brand whose products are referring to the oeuvres of other artists.
Bridging the borders between fields, the three talked regarding what art means for each, with topics ranging from life and livelihood to the upcoming 2020 Tokyo Olympics. What appeared next were the passionate attitudes of the guests to shed light on and draw broad attention to the invisible; those who are apt to be ignored in the society.
(Yusuke Yamagami)

「暮らすアート」について語り合うゲストたち。
左から、いちむらみさこさん、米田年範さん、奥山理子さん。
右は司会を務めたTERAKKOの梅澤光由さん。

暮らしと社会、「気づき」をうながすアート

――アートは本来、私たちの暮らし、その向こうにある社会に密接に関わっているものです。本日のパネリストの皆さんは、異なる分野で活躍されていますが、暮らしや社会にアートを取り込んでいくという点では共通していらっしゃいます。まず、それぞれのご活動について自己紹介をお願いいたします。

「アール・ブリュット」を地域に開く

奥山　私は京都にある「みずのき美術館」のキュレーターと、東京都が進めているアートプロジェクトのコーディネーターを務めています。

みずのき美術館は、2012年に京都の亀岡市にできた、床屋さんをリノベーションしたギャラリーです。この美術館はアール・ブリュットの活動を支援する事業の一環で2012年に開館をしました。母体となったのは、知的障害の成人の方たちが暮らす入所施設です。私の母が施設長を務めているので、私は幼少期から遊び場のようにして、70名ほどの入所者と休日を共にしていました。

この施設では1960年代に、日本画家を指導者として絵画による余暇活動を開始しました。70年代後半から本格的な絵画指導に切り替えて、公募展などで入賞が相次ぎました。それが90年代に国内外の美術関係者から注目を浴び、今のアール・ブリュットの草分け的存在として「みずのき」の絵画作品は紹介されてきました。その経緯を経て、芸術的を地域資源として発信していこうと美術館をオープンしました。「みずのき」で暮らす人たちの日常が私のそばにあることが、企画の原動力になっています。「生きること」、「関係性」、そして「幸せについて考える」、という3つのミッションを持って美術館運営をしています。

また、アーツカウンシル東京が東京都とともに昨年度から始めた「TURN」というアートプロジェクトにも関わっています。こちらは、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトとして2015年に始動しました。異なる背景を持った人たちとの出会い方、つながり方に創造性を携え、働きかけるプロジェクトとして展開しています。プロジェクトの現場となる、福祉施設やフリースクールなどへのコンタクトや伴走役として携わっています。

アートをファッションに落とし込む

米田　僕は「ワンピースとタイツ」という、アーティストやデザイナーの作品を衣服に落とし込んで、作品と生活を密接にするというコンセプトのブランドを展開しています。美術大学を卒業してから洋服の学校に行って、ファッションデザイナーを目指していて、ある時、女性アーティストの友人とタイツを作ってみました。そしたら、彼女にとっては自分の作品をそのまま着られることが良かったというので、ブランドとしてやってみることになりました。

ファッションブランドではありますが、主体はアーティストで、僕はブランドの枠組みを作っています。ファッションアイテムなので消費されるというデメリットもあるんですけど、同時にあまり知られていないアーティストでもファッションという切り口で広まっていくと考え方もできると思っています。うちのブランドはSNSで有名になった時期がありました。そのきっかけは、愛☆まどんなさんという美術家の作品をプリントしたことです。アイドルの「でんぱ組.inc」が着てくれたり、美術家の会田誠さんがいつの間にかモデルをやってくれたり。こういう自然な広がりがよくあるのが特徴かなと思っています。

様々なマイノリティーの痛みを伝える

いちむら　私は、東京の真ん中にある公園のテント村に2003年から住んでいます。テント村の人たちは街で拾ってきたものや不要になったものを集めて、それを交換して暮らしているので、そのシステムを使って、お金ではなく物でお茶が飲める「物々交換カフェ」をやっています。そこで毎週絵を描く会を開いていて、その作品を展示する「エノアールカフェ」を毎週末にやっています。

野宿となると、女性やセクシャルマイノリティーの方々には住みにくい、あるいは居にくい。私自身も住みにくいことがあったので、女性たちが公共の場所で安心して過ごせるようにおしゃべりをしながら情報交換する集まりをやっています。その中から、生理用の布ナプキンを作って販売する「ノラ」というブランドを始めました。女性への性暴力や排除、襲撃などについて発信するためです。布ナプキンは最終的に血まみれになります。「私たちは公共空間で血まみれなんだ」ということをイメージしながら人形や鳥の形をした布ナプキンを作る。この布ナプキンを使用する人たちが密室で血に染め、形にすることで、わたしたちの痛みを同じような立場の女性たちに届けてつながっていこうと思っています。

先ほどオリンピックの話が出ましたが、新国立競技場の建設が始まっています。その敷地にかかるため、明治公園という都立公園にいた野宿の人たちが排除されようとしています。私は野宿の人たちとともに、フェンスに抵抗の記録写真や文書を貼るなどの活動をしてきました。結局、強制排除が起こったのですが、異様な光景だったので映像を撮り、「排除の祭典」という作品を作りました。また、その近くの霞ケ丘アパートという都営団地でも大きな排除が行われました。独り暮らしの高齢の方が多いのですが、住み続ける選択肢はないまま追い出されている状況です。

――いちむらさんと奥山さんの活動は、東京オリンピックとも結びついていますが、アートとオリンピックは微妙な関係になっていますね。

奥山　オリンピックは巨大なイベントなので、一個人として言えるところは少ないと思うんです。ただ、（オリンピックに関連するアートプロジェクトのために）東京に来ている自分を支えているのは、やはり「みずのき」の人たちが隣りにいる、という感覚です。私が社会にアクセスするプロセスは、社会の中ではとても知られにくい（入所）施設という場所で人生を終えようとしている知的障害の人たちの存在と共にある、と考えています。

いちむら　差別された立場の人たちは、何を表現するにもリスクがあります。そこで、閉ざされた環境で絵を描くと自分の思いが解放されていくかもしれません。わたしは差別や襲撃の痛みをないことにせず、自分たちの表現の豊かさを解放していきたい。でも、オリンピックもそうなんですけれども、わたしたちのような立場の人たちを排除をするシステムに対しては、批判的な表現を通してでしかその表現が可能になりません。「みずのき」はオリンピックと無批判につながらない方がいいと私は思います（笑）。

奥山　「みずのき」がオリンピックにつながった経緯について説明しますね。そもそもアール・ブリュットは、作品そのものだけでなく、表現として生まれ出る瞬間、その周縁にある様々な人や物事との関係性が実はとても面白い。そこへの気づきがアール・ブリュットの魅力になっていると思うんです。そこで、障害の重い人とともにアートを楽しむことを目指して、アール・ブリュット美術館４館合同の企画展「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」が2014年に始まりました。監修に美術家・日比野克彦さんを迎えて、施設でのショートステイを体験していただいたんです。一方で、東京オリンピック・パラリンピックを日本社会で多様性を考える契機にしようという国の意思がある。そこから「TURN」が評価されて、2020年に向けた文化プログラムのモデル事業になりました。そのアンビバレントな状況を私自身が今、体験しています。

ーーアートを通して日本を発信するという点では、米田さんもつながる部分があるのではないでしょうか。また、アーティストの表現を押し出していこうとされていますが、それが消費されていくことについて、どんな思いですか。

米田　先ほど紹介した愛☆まどんなさんのタイツやワンピースをアイドルが着用してくれたりして、ブランドの知名度は上がったんですけど、僕がやりたいのは、枠組みを作っていろいろなアーティストの間口を広げていくことです。日本のポップカルチャーをメインに押そうという気持ちはないんですが、その辺が目立つアイテムになって、結果的にはプラスにもなっています。東京都の若手ブランド支援を昨年（2015年）まで受けていて、その括りで「Japan Expo」という、日本のサブカルチャーを紹介するパリのイベントにも招待されました。それを利用して別のジャンルのアーティストも引き上げていけたらなあ、という気持ちでやっています。そのためには消費というルートに乗ることも悪くはないなあと思います。

アートとオリンピックの関係を探る

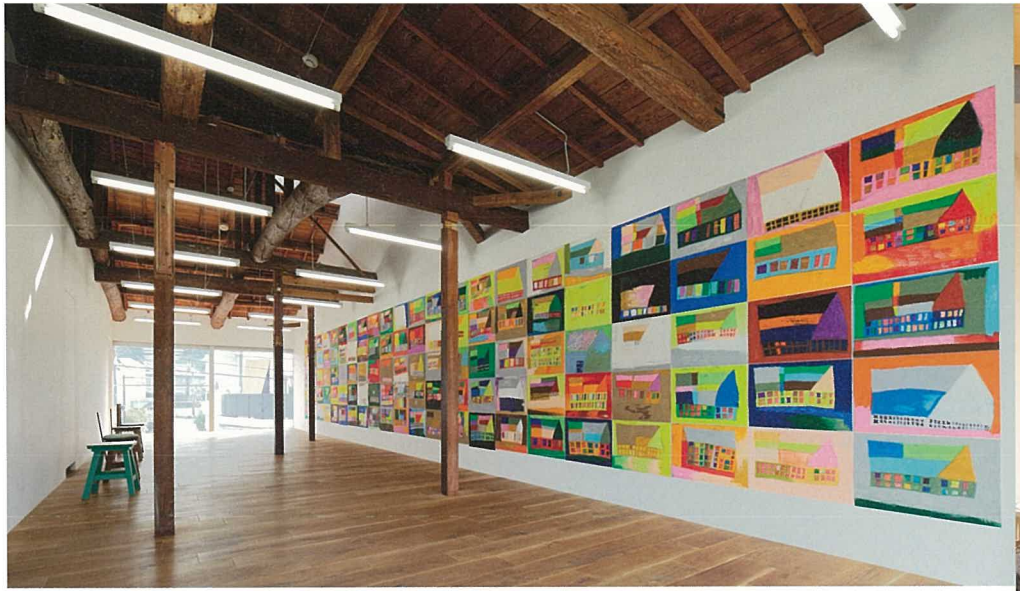
ーーいちむらさんは自身の表現活動の中で、消費に対しても違う見方もあるだろうと考えていらっしゃると思うのですが……。

◀ いちむらさんが暮らすテント村

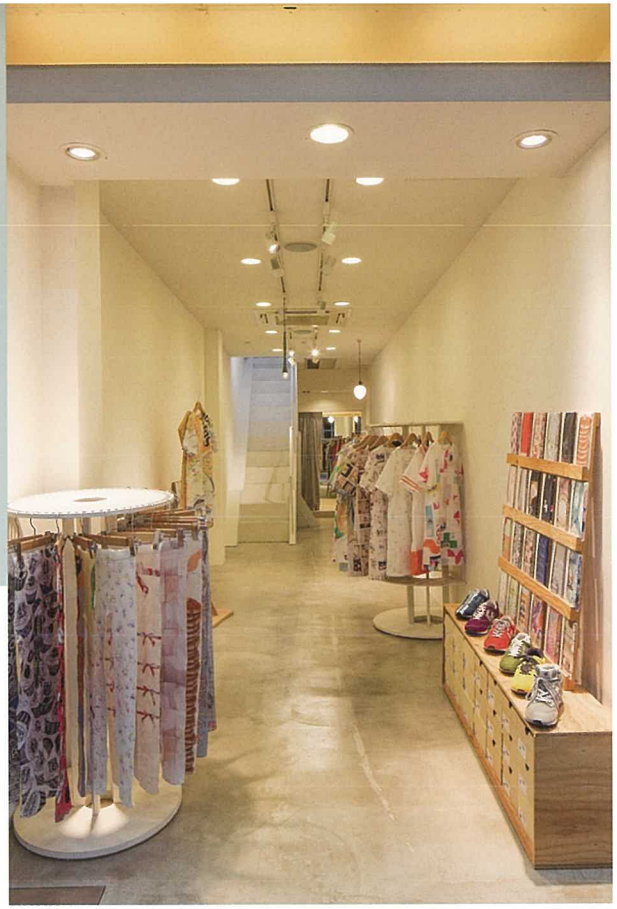
いちむら　私は消費というか、経済システムについては常に考えています。テント村では、住人たちが物を分け合いながら生活しています。お金にあまり関わらないシステムの中で網目のような関係が出来上がって、物がコミュニケーションツールとして回る。この独特のネットワークが豊かな人ほど必要な情報や物が入ってくるんですね。そうすると、資本主義経済の中でそもそも排除されている人が生きていくためには、独自のネットワーク作りやそれを守ることが重要だ、と価値観が変わってきます。
渋谷区の宮下公園で公園のプライバタイゼーションに反対してアーティスト・イン・レジデンスを行いました。アーティストを自称する人はほとんどいなかったですが、自分がいることで様々な社会的な応答や影響を与えるという経験をそれぞれが持ちました。公園で何が排除されて何が優先されているかそのコンフリクトから何かが生まれていくという体感をし、そこから創造は可能になります。オリンピックやメガシステムの構造的暴力に目を閉ざしたまま、夢や希望を見出すようなアートやアートプロジェクトは、そのままその暴力に加担することとなります。そのようなアートプロジェクトはとても恐ろしく、特に社会的に弱い立場に置かれている人たちの暮らしを壊すことになっています。

ーー公園と「みずのき」という違いはありますが、奥山さんもアーティストって何だろうとか問い、異なる価値観を橋渡しされていると思います。

奥山　それは日々の仕事の中で重要なテーマになっています。いわゆるアール・ブリュットの作品を生み出している人自身にはアーティストとしての自覚がないことがほとんどです。そういう人の作品を世に出し、アーティストだと言っていくことに対して、彼らの日常にふれている家族や施設の職員には葛藤があります。そこはまだ答えは見出せていない状況です。私自身はみずのきの人たちのことをアーティストとは言っていません。「みずのき」の作品をアール・ブリュットとして伝えることも今はしていません。私は、日比野克彦さんがおじいちゃんおばあちゃんと朝顔のタネを蒔いて育てることをアートだと捉えたということに、とても豊かなものを感じま



▲みずのき美術館
「ayubune 舟を作る」
2014年
撮影＝表恒匡



▶ワンピースとタイツ
高松店のショップ／
ギャラリー

した。タネを蒔くことをアートとしたように、暮らしの中におこる関係性をアートと呼べるのであれば、社会の課題を、両者の間に生まれる関係性の中でほぐしていくことができるんじゃないか。だから、地縁とか血縁にとらわれない関係性の作り方としてアート、アートプロジェクトに期待をしています。この考え方をオリンピックを契機に一般化できるとしたら、そこに夢を見出していきたいという思いが、私が東京でプロジェクトに関わるきっかけになっています。

ーーアートや表現を、地域をこえて遠い人に届けるという意味では、アートをファッションで発信している米田さんが一番フットワークが軽いのでは、と思います。

米田　僕自身はお二人とは全然スタンスが違うなと感じています。「ワンピースとタイツ」を始めた動機は、やっぱりファッションデザイナーとして自分が携わったものを使ってもらえると嬉しい、ということです。アーティストも少しでも広がる可能性を感じたから、関わってくれたのだと思います。一人で何かを発信するという力がないので、僕は枠組みを作ろうとしています。昨年は札幌のアートフェアに呼んでいただき、今年は大阪のアートフェアにも参加しました。近く高松に店を出すんですが、2階をギャラリーにできそうなので、もう少しアートに焦点をあてた活動、発信ができるかなと思っています。

ーートークセッションを通して、いろいろなところにアートが作用していることがわかりました。オリンピックという巨大イベントにもアートは関わっています。それに対していろいろな立場がありますが、こういったコミュニケーションを重ねること自体がとても大切だと思います。

西荻映像祭 2016
- あなたとわたしの間のこと -

NISHI-OGIKUBO FILM FESTIVAL 2016
-Things Between You and Me-

開催日：　2016年9月9日（金）、10日（土）、11日（日）18:00～22:00
会場：　ビリヤード山崎（東京都杉並区西荻北3-19-6）、
旅の本屋のまど（東京都杉並区西荻北3-12-10 司ビル1F）、
フジクリーニング（東京都杉並区西荻北4-3-1）
参加アーティスト：秋山由希、キュンチョメ、林千歩

Date :　2016.9.9 (Fri.) 9.10 (Sat.) 9.11 (Sun.) 18:00~22:00
Venue :　Billiard Yamazaki (3-19-6, Nishiogi Kita, Suginamiku, Tokyo)
Nomad Books (3-12-10, Tsukasa Bldg, Nishiogi Kita, Suginamiku, Tokyo)
Fuji Cleaning (4-3-1, Nishiogi Kita, Suginamiku, Tokyo)
Artist:　Yuki Akiyama, KYUN-CHOME, Chiho Hayashi

あなたとわたし 狭間を映像で探る

「西荻映像祭 2016」では、新進気鋭のアーティスト3組が、西荻窪駅周辺の店舗を舞台に作品をつくり、各店舗で3日間限りの上映会を開催しました。参加アーティストは、林千歩、秋山由希、キュンチョメ。今回は「あなたとわたしの間のこと」をテーマに、個人の空想、人と人との間に生まれる感情や関わり、そして社会の中の個人など、わたしたちを取り巻く関係性を探りました。
店舗とアーティストの出会いから生まれた作品は、日常に新たな色彩を加え、わたしたちを現実と空想の狭間へ誘いました。
（髙村瑞世）

You and Me, Differences Sought in Film

In the "Nishi-Ogikubo Film Festival 2016," three upcoming artist groups created works grounded in the shops around Nishi-Ogikubo Station and screened those at each store for three days. The three artists were Chiho Hayashi, Yuki Akiyama, and KYUN-CHOME. This time, setting the theme as "Things Between You and Me," they explored various relationships around viewers such as individual fantasies, the feelings and connections which arise between people, and individuals within society.
The films born from the encounter of artists and the shops have added new colors to everyday life and invited us to the space between the reality and fictions.
(Mizuyo Takamura)

ビリヤード店の２階を会場に、林千歩の作品を上映する。
手前のビリヤード台が主要な撮影現場だった。

林千歩

CHIHO HAYASHI

林千歩劇場『崖の上のティボリ』編

交錯する虚構と現実、記憶とエロス

林千歩は、創業 85 年の歴史をもつ「ビリヤード山崎」を舞台に重層的な作品を制作・上映しました。セクシーな女店主によるビリヤードのレクチャーと思い出語り、作家の幼少期の記憶をもとにした神木ティボリをめぐる指人形劇、ビリヤード台を囲み黙々と指人形劇を演じる人々、そしてクモがイモ虫を捕食する虫の世界。これら異なる世界が交錯し虚構と現実が入り混じります。

中心となる指人形劇は、神木ティボリを愛する裸の男が肉や衣服を得て、女に出会う創世神話のような物語です。指人形劇に限らず、中にはエロスや男女といった起源を象徴するモティーフが散りばめられています。しかしそこからは、生殖という創世に不可欠の展開が脱落しているようです。

神話や歴史の舞台に個人的な思い出や欲望を置くことで、自身をとりまく世界の成り立ちを問い直す作品なのかもしれません。

（榎戸杏子）

秋山由希

YUKI AKIYAMA

私がここにいない理由

書店の日常に旅の追体験重ねる

「西荻映像祭」への参加は 2013 年に続いて 2 回目となる秋山由希。制作前に何度か「旅の本屋のまど」に足を運び、構想を練りました。映像は「のまど」の日常的な場面から始まります。定点カメラで、よく見ると店主が微動している程度の映像が 20 分ほど続き、その後、地球儀がクローズアップされ始め、棚から本が消え去っていきます。空虚な店内の映像に変わり、様々な土地の風景と本を音読する声が入り交じります。

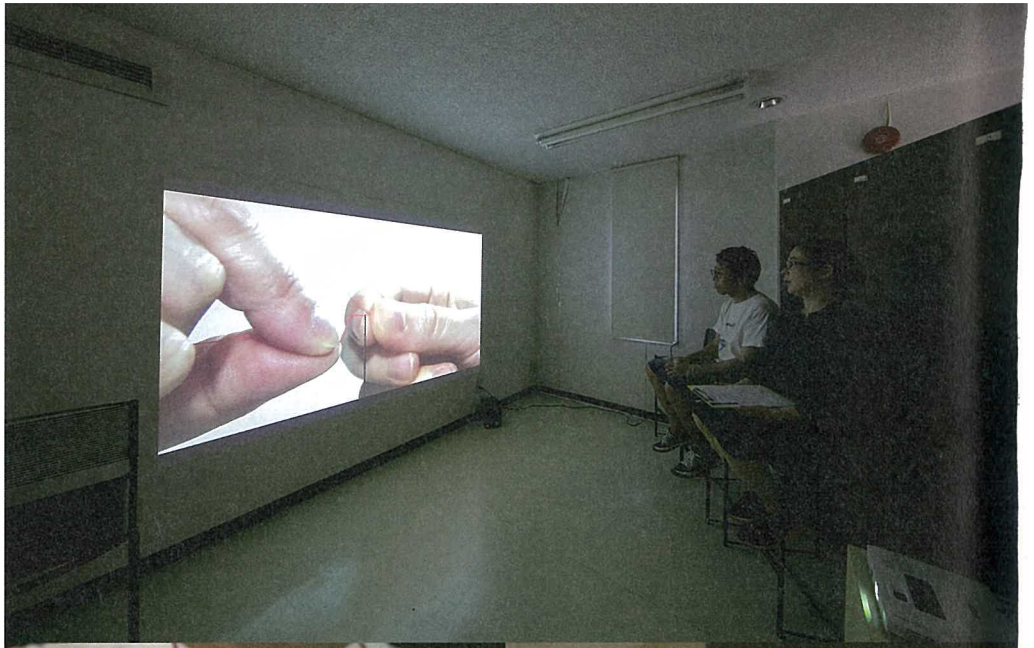
映像を通じて、店主がここにいる意味や役割を再認識させられるとともに、「のまど」で本を手に取り、旅を追体験する時のような感覚を呼び起こす作品となりました。

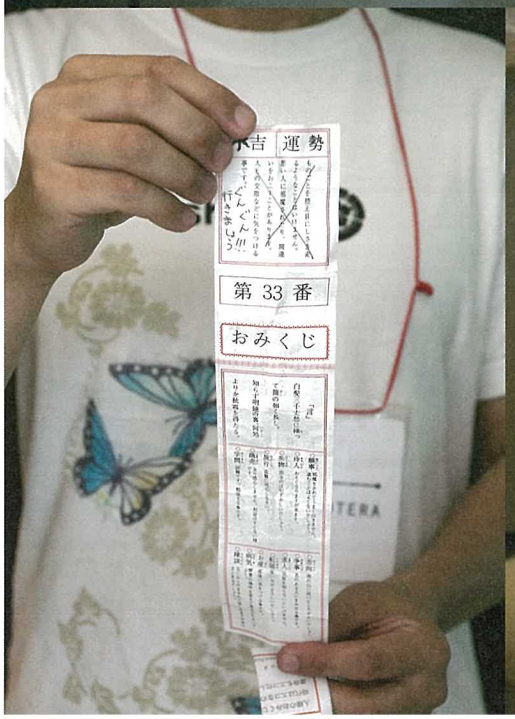
（吉田絵美）

キュンチョメ

KYUN-CHOME

針と糸と





思索を促す、対立と協調の映像

「フジクリーニング」のらせん状の階段を上った先は薄暗い空間。そこに投映されるのは、数人が1つの針に赤い糸を通そうとする指の動きです。時に攻撃的になったり時に助け合ったりする指先。その主は性別も国籍も分かりません。

「針と糸」に描かれるのは、対立と協調、そして針に糸が通ったという達成感の繰り返しです。

次に目に入るのは、「運命のリサイクル」という名のガチャガチャ。出てきたプラスチック球の中身は、リサイクルのおみくじ。一喜一憂が待ち受けます。

さらに奥まったスペースには、長い間忘れられていた鯉のぼりをスーツにして身にまとい、空中へダイブする映像「僕と鯉のぼり」。かつて夢を託された鯉のぼりは空の中で再び息を吹き返したようです。キュンチョメが独自の感性で追求している作品に、観ている人もいつしか思索の海に引き込まれてしまいます。

（三浦留美）

TERATOTERA祭り 2016 Involve
–価値観の異なる他者と生きる術–

TERATOTERA FESTIVAL 2016 INVOLVE
-To Live in Diversity-

日時：	10月8日（土）、9日(日)、10日（月・祝）11:00～19:00
会場：	三鷹駅周辺施設、空店舗など10カ所
アート展示：	浅井裕介、うらあやか、遠藤一郎、利部志穂、河口遥、田中義樹、永畑智大、橋本聡、ハンバーグ隊、東野哲史
ライブ：	渋谷サイファー、蜻蛉 -TONBO-、BATIC+ermhoi
パフォーマンス：	阿目虎南（大駱駝艦）
トークゲスト：	上田紀行

Date :	2016.10.8(Sat.) 10.9(Sun.) 10.10(Mon.) 11:00~19:00
Venue :	Mitaka Station Surrounding Area
Artist :	Yusuke Asai, URAAYAKA, Ichiro Endo, Shiho Kagabu, Haruka Kawaguchi, Yoshiki Tanaka, Tomohiro Nagahata, Satoshi Hashimoto, Thanks-thai, Tetsushi Higashino
Live :	Shibuya Cypher, -TONBO-, BATIC+ermhoi
Performance :	Conan Amok（DAIRAKUDAKAN）
Talk Guest :	Noriyuki Ueda

CONCEPT

困難な現実と向き合う、アートの可能性

意見の異なる人間同士でも、話し合えばお互いを分かり合うことができると小さい頃はどこかで信じていた。たとえ全く話の通じない相手に出会ったとしてもその人とは距離を置いたり相手にしなければいいのだとも。でも現実はそう簡単ではないことがようやく最近になってわかってきた気がする。

世界中で止むことのないテロ、解決策が見えない難民や移民問題、イギリスの EU 離脱やトランプ大統領の就任なんてのも記憶に新しい。国内に目を向ければ、数年前に破滅的な状況を招いた原発は日本中で再稼動の準備が進み、それを推し進める政党の支持率は概ね安泰のようだ。

こうした現実に直面する中、私だけでなく、多くの人々は気付き始めている、あるいはとっくに気付いているはずだ。私たちは価値観の異なる他者に囲まれて生きているのだと。

では、そうした他者に距離を置き、自分自身の価値観の中だけで生きていくことはできるのだろうか。答えはもちろん NO であろう。特定の他者と関係を絶つことのできる逃げ場なんてこの世界にはもうどこにもないのだから。

今年の TERATOTERA 祭りでは、『Involve - 価値観の異なる他者と生きる術 -』というテーマを掲げている。アートは多様な価値観を担保するものと言われて久しいが、本当にそうした機能を持つのであれば、私たちがこの現実世界で直面せざるを得ない、価値観の異なる他者と生きていくためのヒントが沢山詰まっているはずだ。

「Involve」とは「巻き込む、巻き添えにする」という意味の言葉であり、今回の展示作家には、観客を自らの作品に何らかの形で巻き込んでいって欲しいと伝えた。距離を置くことも無視することも許さないアート作品は、価値観の異なる他者と生きる術を私たちに与えてくれるのだろうか。本展は現代社会におけるアートの存在価値を問う挑戦でもある。

ディレクター
小川希

The possibility of Art to face hard reality.

When I was little, I believed to some extent that everyone is capable of understanding one another despite sharing a different perspective. Even if I met a person with whom I could by no means communicate with, I could just keep distance from them or ignore them -but I have only just come to understand that reality is not so simple.

Unstoppable terrorism in the world, the yet unseen solution for the issue of immigrants and refugees, Brexit, and the inauguration of Trump are all fresh in the world's mind. If you look inward, you will find that the preparation for the reactivation of nuclear power plants over Japan is in progress, which once generated the destructive situation of just a few years prior. It seems the government pushed forward the reactivation with relative security in their approval ratings.

Facing those realities, not only me but everyone has taken notice, if they had not already. We are living among others with different values.

Well, could we then just live in our own sweet, ivory towers keeping distance from all others? The answer is of course "No." For there in this world there is no semblance of a refuge where one can just cut the connections with and escape from particular people.

TERATOTERA Festival this year decided on the theme of "Involve -the art to live with others of different values." It has been a long while since art came to be regarded as a catalyst of a variety of values. If such is true, art should be replete with tips on how to live with others whose values differ, who we cannot run away from in reality.

Under the theme of "Involve," I asked artists in this show to bring spectators into their works. Do artworks which do not allow us to ignore or distance ourselves from other's values bestow any "art" upon us regarding how to live with others who share different perspectives? This exhibition is also a challenge to artist's "raison d'être" for art.

Director
Nozomu Ogawa

浅井裕介（中央左）が公開制作中の現場を、遠藤一郎（中央右）率いるカッパの一団が訪問。
駅前広場がなごやかな「異類交歓」の場となった。

ART

非日常の世界に観客を巻き込む

TERATOTERA 祭り 2016 のテーマは「involve」。「包摂する」「巻き込む」といった意味です。そこから作家たちは「観客を何らかの形で巻き込む」展示を目指しました。街なかの公園にカッパがたむろし、喫茶店の扉を開ければホストクラブがある。そんな非日常な空間が突如出現しました。観客は会場をめぐるたびに、それぞれの作家が提示する様々な価値観と出会ってしまう。驚きや気づきを通して、観客は自分の生活を別の角度からみる機会を得たかもしれません。
(池田佳穂)

Involving Viewers in an Extraordinary World

"TERATOTERA Festival" is a large exhibition for not only visual arts but also street-performance arts.
The theme of TERATOTERA Festival 2016 was "involve," based upon which artists aimed at the goal of inclining viewers to participate in their artworks. There were water imps gathering in the park, and if one opened the door of an old-fashioned café they would find a flashy boys' bar instead–such an extraordinary space appeared all of the sudden. Wandering around the stages, spectators could view multiple perspectives brought up by each artist. Marvel and realization may allow them the opportunity to see the world through a different angle.
(Kaho Ikeda)

田中義樹

YOSHIKI TANAKA

ホストクラブ uwatoko 君の瞳をインボルブ

ホストからアートへ愛を込めて

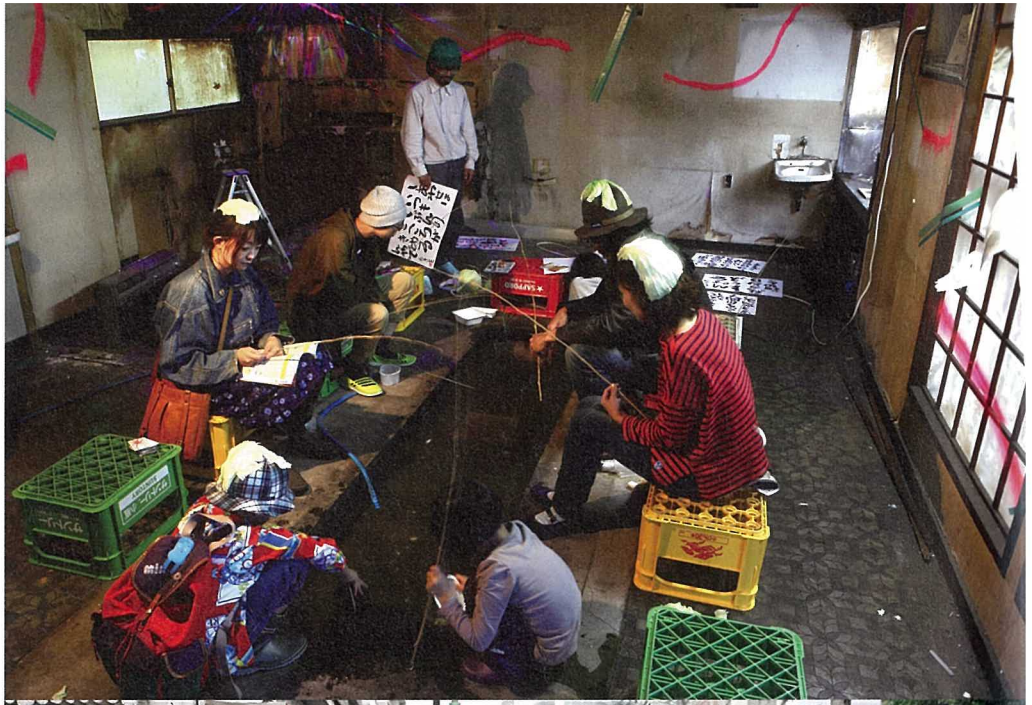
田中義樹の「ホストクラブ uwatoko 君の瞳をインボルブ」は、三鷹駅北口近くにある「レストラン喫茶 上床」を舞台に展開されたホストクラブ型のインスタレーションです。「ホスト狂いのごとくアート狂いになるほどアートを好きになってもらうクラブ」を目指し、若き芸術家たちがホストとなって来場者に芸術の魅力を伝える本気トークを展開しました。その熱意を支えたのは「みんながアートを好きになれば、世界は平和になる」という田中の哲学。バブリーな BGM と真っ赤な照明に彩られた店内で、時に自身の作品を自ら説明し、時に質問に答え、楽しく真剣にディープな芸術談義を繰り広げました。

（梅澤光由）

東野哲史

TETSUSHI HIGASHINO

たきを（実家）



人を結ぶ、過剰な「おもてなし」

廃屋で釣り堀を営む華奢な男「たきを」。東野哲史が扮する男店主は、客を心いっぱいの「おもてなし」で迎えます。釣れそうにないフナの稚魚と格闘する客に通信講座の受講を勧め、期限切れのポイントカードをプレゼントし、どこかで見たことのある名言を書にし、客の頭にキャベツを被せる。店を後にする客がいれば、ラジカセを肩に担ぎ、ボイスミュージックを大音量で流しながら次の行き先まで案内する。そのどれもが全く生産的でない行為が、多くの客は彼との時間を楽しみ、戸惑いつつも笑顔で去っていきます。いつの間にか「たきを」は祭りの人気者となり、肩に乗せた大きなラジカセでその細い足腰を軋ませながら、客と一緒にまちを闊歩していました。（遠山尚江）

永畑智大

TOMOHIRO NAGAHATA

それいけ デ・クンニくん

似顔絵でスピリチュアルな癒しを

普段「価値観の違う他者」とはあまり接しないようにしているという永畑智大が、ついにこの日がきたかと考えた作品でした。
多くの人が行き交う三鷹駅南口のデッキ広場に設けた「スピリチャル似顔絵会場」。そこには、緑色の髪の毛をした顔だけの巨大張り子の着ぐるみを着て、工事現場用の黄色いヘルメットにサングラスという、怪しい出で立ちの画家が待機します。周囲では、蛍光色の帽子とブルゾンを着たボランティアがポケットティッシュを配る。ティッシュの裏には、作家が描いたマンガのチラシが入っています。そのテーマは「価値観の違う他者と生きる術」。
会場では、不安げな客を前にした永畑が、柄が腕ほどの長さの筆でさらさらと似顔絵を描き上げていきます。緑、黄、赤、青の色で出来たスピリチャル似顔絵は、意外にも心なごむ仕上がりでした。
（神山綾子）

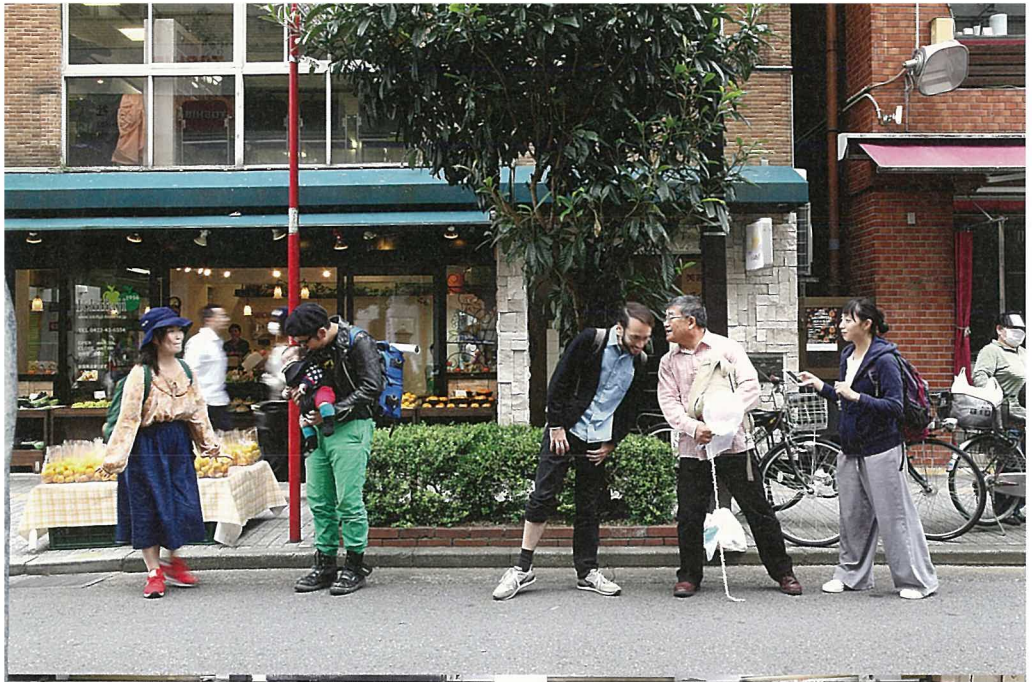
遠藤一郎

ICHIRO ENDO

カッパ族

街の視線かっぱらったカッパたち

三鷹駅北口を出て左に曲がると、ベンチが３つ程並んだ小さな公園があります。そこに遠藤一郎が扮する「カッパ師匠」が仲間を連れてやってきました。
カッパたちはその広場にブルーシートを張って、お茶をしたり、お話したり、たまに人間に声をかけたりと、自由に振る舞います。
それに対して人々の反応は様々で、遠くから写真を撮っていく人、笑っている人、無視する人、近所だから気になってと声をかけてくる人、一緒にお茶する人、子供のころカッパを見た事ある（！）と話しかけてきた人、訝しげに遠巻きに見ている人などなど。
こんなにも多くの反応があったということは、人々は普段の人間と人間との関係ではないコミュニケーションをとっていたのだと思います。カッパたちの振る舞いも、人々と関わるたびにどんどん変わっていきました。カッパたちも人間たちも何かが変化したことを感じているはずです。「何かが変わる」という曖昧だけどなぜか憧れてしまうこの言葉は、もしかしたらカッパの力で現実になるかも!?
（福家由美子）



うらあやか

URAAYAKA

ビーズのネックレスがほどけて

意味を解く 繊細な「伝言ゲーム」

「伝言ゲーム」。この言葉を聞いて、どんな風景を思い描くだろう？幼いころ、誰かの耳元でささやくことにわくわくした気持ちか。もしくは無邪気に遊んだあくる日の夕暮れか。

うらあやかの作品は、形としては伝言ゲームでした。でもそれは短い文章を一文字ずつに分解して伝えていくもの。しかも次の人に伝えたら休む間もなく次の言葉がくる。次々に与えられた言葉をつないで一つの文章として理解することは不可能で、まるで言葉が私たちの間を通り過ぎていくかのよう。その経験は、どこか別世界に飛ばされたような、とてもポエティックなものでした。少しつついたら壊れてしまいそうなあの繊細な時間は、いつまでも瑞々しく私たちの記憶の中に残るのでしょう。

（阿部葉子）

橋本聡

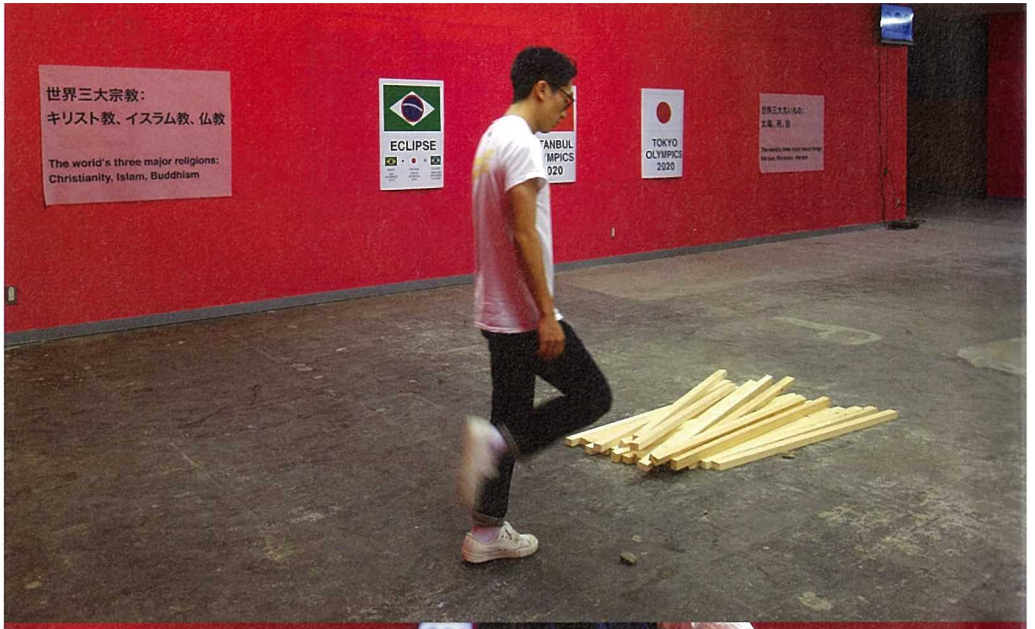
SATOSHI HASHIMOTO

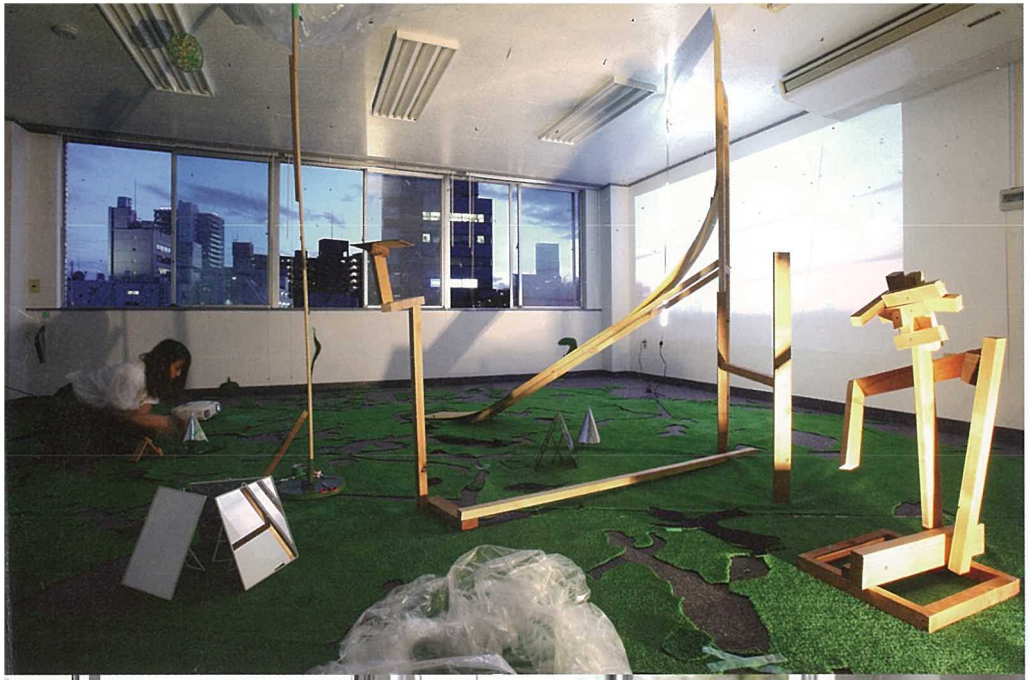
《転がる石、オリンピック、太陽、月、冷たい水》

大統領選と五輪 緊張感に満ちた空間展示

アメリカ大統領選を１ヵ月後に控えた10月初旬。橋本聡の展示では、大統領候補者として争っていたトランプ候補とクリントン候補の写真が大量に平積みされていました。ポスターは持ち帰り自由で、その数ではクリントン氏が優勢でしたが、結果はご存知のとおりです。会場となった空き店舗の空間は、緊張感と不安感を煽る蛍光色の赤で覆い尽くされ、４年に一度、同年に行われるオリンピックとアメリカ大統領選を軸に、会場の２つの時計は同じ時刻を刻みます。しかしながらこの２つの時刻は、東京とその地球の真裏にある時差12時間のリオの２つの時刻でもあります。スポーツと政治、宗教とネーション、非暴力と暴力、歴史と時間。そんな言葉が観客の脳裏に去来する中で、思考の交差を拒むかのごとく、静かな空間を切り裂く石の鈍い音が響き渡ります。作家自身やボランティアスタッフが無表情に石を蹴り続けているのです。その一方で、会場には「この水を飲めます」「振り回せ」「自身に塗れ」などの指示書が、氷水の入ったコップ、角材、スプレーの前にそれぞれ貼られています。ときに暴力的な内容も含む指示書に、多くの観客は困惑し、観賞という枠組みから脱せないでいる中、自身の境界を踏み超えた動きを見せる観客も。蹴られた石は足元をかすめ、だれが観客で何がパフォーマンスか手探りに、緊張感や不安定さはその空間に満ちていきます。

（橋口聡美）





利部志穂

SHIHO KAGABU

コねコ、ネコになりたいけど、居ぬ。

非言語的な、原初の関わりを探る

雑居ビルのワンフロアを使った利部志穂の展示は、ボールが吊り下げられ、鏡や木材など様々なモノが配置された空間。ネコの遊び場のようにも見えますが、そこで「遊ぶ」のは観客。低く張られたテグスに引っかからないよう身をかがめながら、床に敷かれた人工芝を思い思いの形にハサミで切り取っていきます。

ここはあらゆるモノとのコミュニケーションの場。現代ではSNSで簡単に人と繋がれるように見えても、全ての他者と関わることは決してできません。しかし一方で、人間には動物やモノを含むあらゆる対象とコミュニケーションする力が備わっていると考える作家は、言語によらない原初的な関わり方へと私たちを誘います。

「私はどこに立ってるの？あなたはどこにいますか？もっと強く発信してください。こちらはそれを反射します。」

開け放たれた窓から見える建物の屋上には光を反射する仕掛けが施され、モールス信号のようにきらめきます。注意深く目を凝らせば、誰かからのメッセージはいつでも届いているのかもしれません。

（小西佐和）

淺井裕介

YUSUKE ASAI

生きとし生けるものへ

泥絵が呼び戻す 地中にまどろむ過去

三鷹駅北口広場に立つ、駅舎を超えるほどの椎の大木。その懐に抱かれて淺井裕介の泥絵制作は始まりました。泥絵は足元の土と水とを絵具にして描かれ、三鷹の地中深くに染み込んでいる過去を現代に呼び戻す。作家の指先からいきものや精霊が次々と現れ巨大なキャンバスは時空をつなぐ窓となりました。

作家の希望に応えて観客が押した泥の手形は鳥となり狼となり命を宿し、ドングリの実は土の兄弟たちを歓迎して軽やかな音を立て降り注ぐ。刻々とにぎわいを増す作品の前で立ち止まる人、見入る人、小さくため息を漏らす人。日常の中に突如現れた泥からの便りに頷きながらそれぞれの暮らしの中に帰っていきます。

泥絵は時を経て土に還り、ここで得た記憶を身にまとい眠ります。作家が再びこの場所に立つ日を想いながら。

（前川順子）

河口遥

HARUKA KAWAGUCHI

“最後に私になぞなぞ出してね！
あと、あなたの考えた星の名前をつけてね！”

観客を巻き込む ファンシーな追跡

廃屋の一室を会場とした河口遥の作品では、来場者が「宇宙人」の質問に答えます。でも、それはちょっとした会話にすぎません。問題は会場を出てからで、宇宙人に漏らされた個人情報をもとに後から来た来場者に探され、見つかった暁には名前を付けられます。他人に名前を付けられるということは、他者に他者性を押しつけられるようなものかもしれません。しかし自分もまた同じように前の来場者を探し名前を付ける立場なのです。このちょっと暴力的な連鎖がなぞなぞと風船というファンシーアイテムに包まれて広がりました。

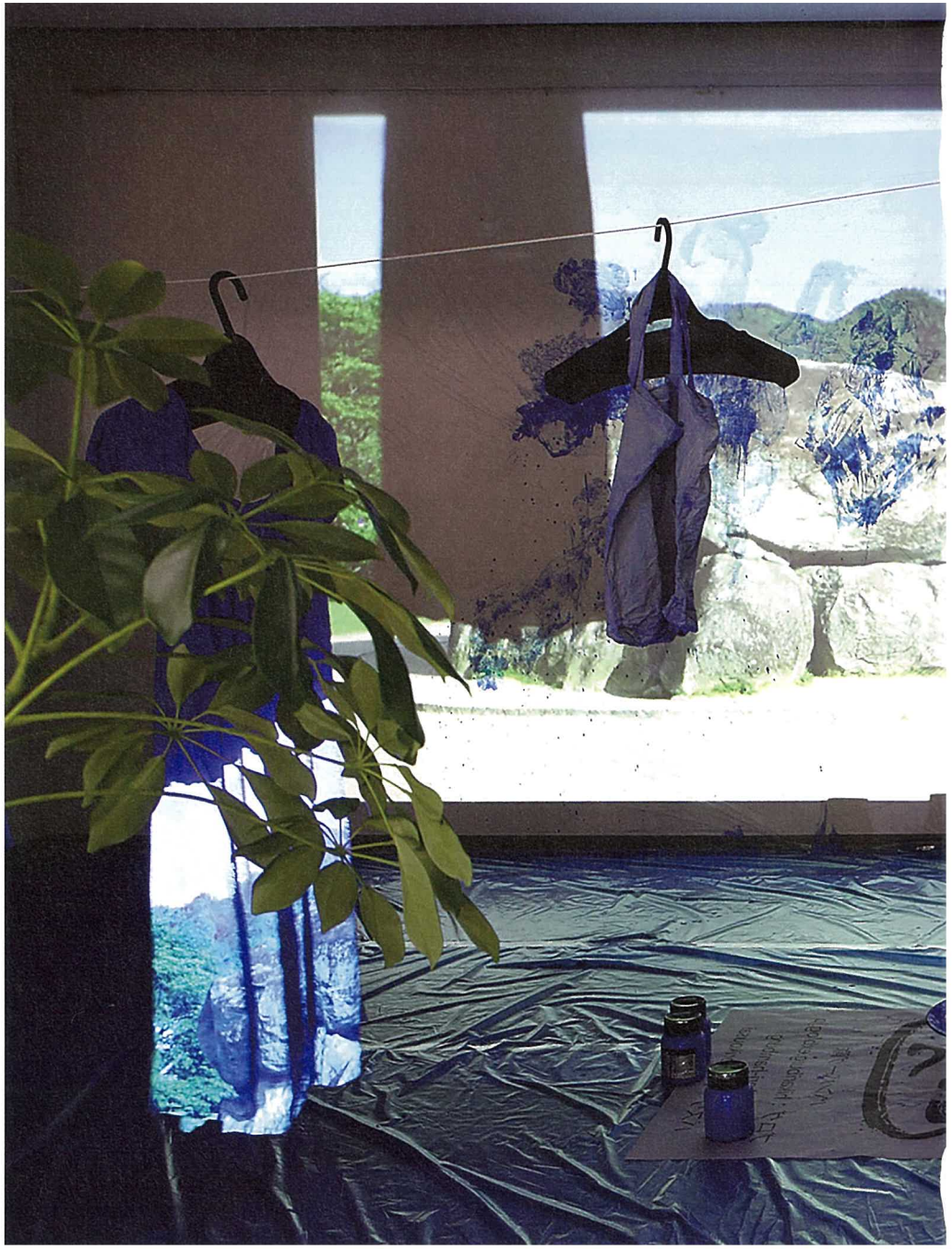
自身の名前で作品を発表する作家に対して、鑑賞者やボランティアは常に匿名です。これはそうしたアートの匿名性を崩す試みでもあり、鑑賞者が標的となり名前を与えられました。

（榎戸杏子）

ハンバーグ隊

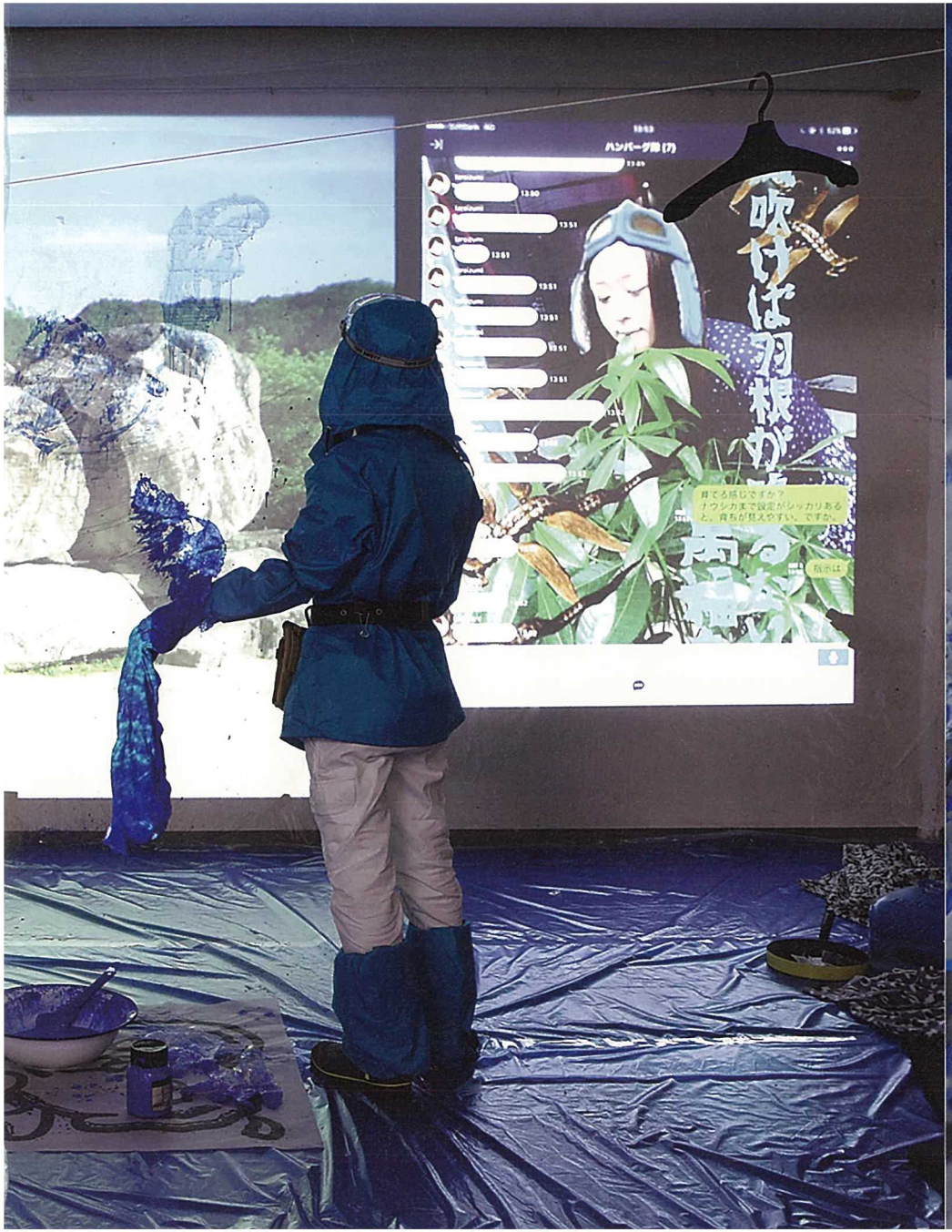
Thanks-Thai

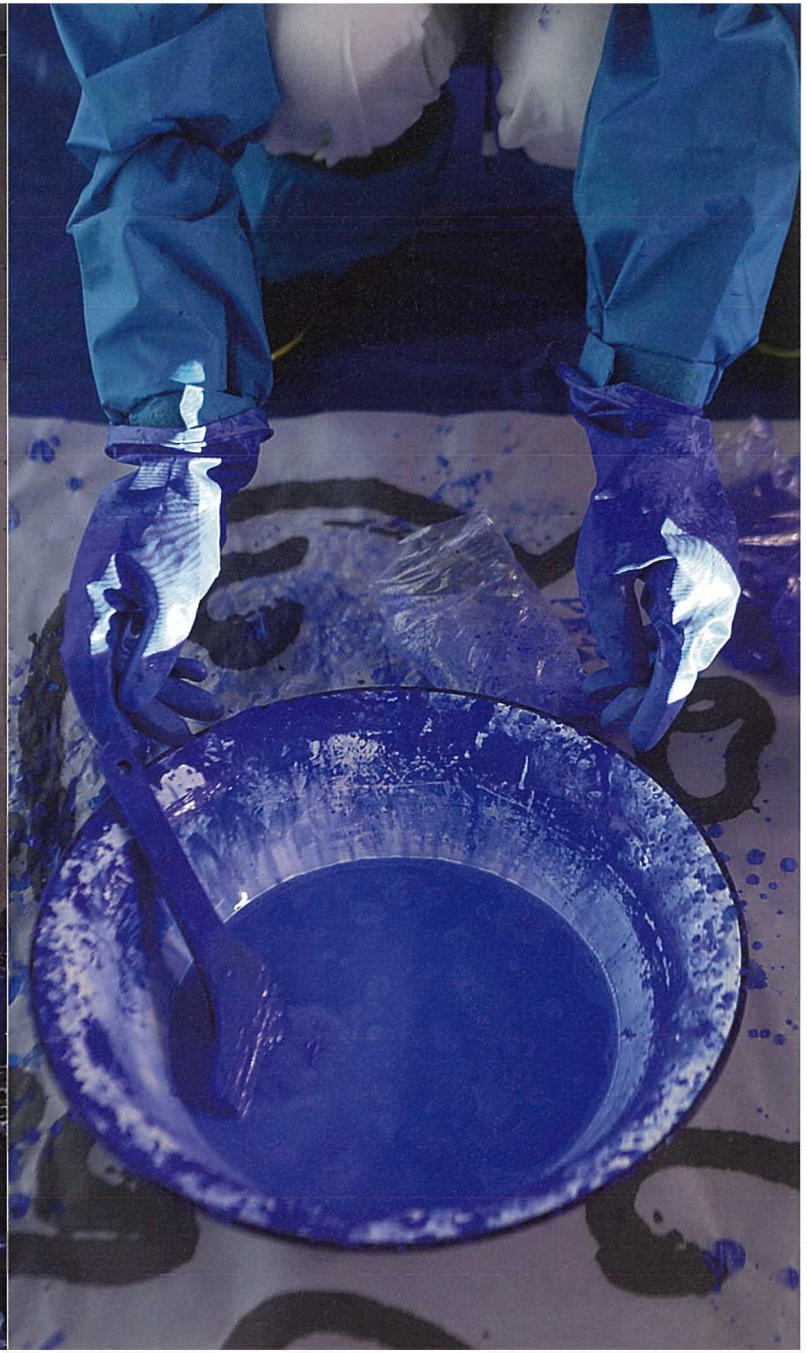
石



不意を突く 仮想・現実ないまぜの異空間

雑居ビル内にある洋品店向かいのフリースペース。ここに現実と地続きであるかのような異空間が出現しました。
入口では、イベント会場のように缶バッジ等のグッズを売り、薄暗い奥の空間には、壁一面に奈良の石舞台とスマホの画面が並べて投影されています。そこには青い衣裳に身を包んだヒロイン「ナウ鹿（ナウシカ）」がいて、何やら観客に話しかけてきます。不確かなコミュニケーションの後、彼女はゴム手袋をはめ、観客が選んだ服を青い液体に浸し、おもむろに立ち上がったかと思うと石舞台に向けて力いっぱいに投げつけます。壮大な物語の一場面に立ち会っているかのような厳かな雰囲気の中、投影されたスマホ画面を見ると、ここでは、ヒロインにエールを送り、時に観客を餌食に盛り上がるLINE 特有のノリの会話がリアルタイムに続けられています。これらを他人事のように覗き込んでいると、突如ナウ鹿が染めたばかりの蒼き衣を手に現世的な要求をつきつけてきます。観客は不意を突かれ、混乱の内に選択を迫られる当事者とさせられるのです。
（千葉佐奈子）


ハンバーグ祭(7)
吹けば羽根が
育てる感じですか？
ナウシカまで設定がシッカリあると、育ちが見えやすい。ですか。



LIVE

※10月8日（土）のみ

柔道場とラップ 変容する時空間

ライブの会場は住宅街にある柔道場。しかし、扉を開ければ、そこにはクラブミュージックの低音が響き、レーザーがきらめく異空間でした。アーティストにとっても、普段は出会うことのない観客を前にしたライブになりました。
緩やかな風貌と音でライブを開始したのは BATIC。不思議な音を絡み合わせた演奏は、「風景」を聞くような経験でした。ライブ当日の雨の風景のようにも響き、柔道場の空気がクリアになっていくかのよう。途中からボーカルの ermhoi が参加し、声も一つの音となって、会場の空気に溶け込んで行きました。
そんな空気の中、飄々とした感じで蜻蛉が登場します。ときに鋭さやドス黒さのような重みを感じさせつつ、でもポップでもある。柔道場にレーザービームが飛び交い、畳の空間が妖艶な和の、少し大人な雰囲気になりました。
最後に登場したのは渋谷サイファー。観客への自己紹介的なラップから始まり、渋谷路上での即興セッションを日々行う彼らの場を掴む力と言葉、音で会場が暖まってくる。観客の女性を口説く即興ラップも披露。観客を巻き込みながらライブは最高潮を迎えました。
（池田佳穂・小山里実）

A Judo Hall and Rap: Changing Space-time

The live venue was a judo hall in a residential area. However, once the door was opened, there was another dimension where bass sounds groaned and beam lights gleamed like a night club. This show was also a rare opportunity for artists to see spectators who rarely have the chance to meet with them.
The music-live began with a laid-back band, BATIC. Their strange, interweaving sound made listeners think as though they were listening to "scenery." Resonating with the rain on the day of the performance, it looked almost as if the air in the judo hall had cleared. Ermohoi, the vocal of this band, joined the session partway through. With the inclusion of her voice, all the sounds became one and melded into the atmosphere of the venue.
Inheriting the atmosphere, TONBO swirlingly boarded the stage as the second act. He delivered a heavy, sharp, dark, and yet pop-y sound. Laser lights streamed back and forth in this woven-grass “tatami” mattress room disguised as a seductive Japanese traditional space.
The last act was decorated with “Shibuya Cypher.” Beginning with an introductory rap, they grabbed the attention of audience using their attractive voices, music, and lyrics which they trained and earned on the streets of Shibuya through repeated rap sessions. They even improvised a rap to flirt with a female spectator. With the inclusion of the audience, their performance came to a climax.
(Kaho Ikeda / Satomi Koyama)

渋谷サイファー

SHIBUYA CYPHER

BATIC + ermhoi

ベイティック＋エルムホイ

蜻蛉 -TONBO-

トンボ

PERFORMANCE

※10月10日（月・祝）のみ

風景を変えた、白塗りのダンサー

「TERATOTERA 祭り」最終日の夕刻、三鷹駅北口にあるタワーマンション前の広場で、屋外パフォーマンスが行われました。黄昏時の街頭、待ち受ける観客の前に、ゆっくり現れたのは舞踏家・阿目虎南。黒いスーツに白塗りの身体をつつんだダンサーの姿にざわめきが広がっていきました。哀愁漂うシャンソンをバックに展開する濃密なダンス。強くしなやかな身体からは中性的な美しさが見え隠れし、まるで男女の哀しい別れを見ているかのよう。その姿に人々は魅了され、会場は静かな一体感に包まれていきます。強い存在感を放つパフォーマンスが、街の風景を一変させました。
（遠山尚江）

A Whitewashed Dancer Who Changed the Scenery

At the sunset of the last day of TERATOTERA Festival, outside performance were held in the quad of a tower apartment. Under the streetlights at dusk, a dancer Conan Amok slowly appeared in front of the waiting viewers. A stir was spreading through the audience in anticipation of the appearance of the painted-white dancer in his stark black suit. He developed a very rich dance with an indefinably sad chanson. His strong, lithe body described off-and-on androgynous beauty, which reminded viewers of the sorrowful separation of a couple. The audience was amazed and entranced in a sense of closeness. His strong presence drastically altered the scenery of the town.
(Hisae Toyama)

阿目虎南（大駱駝艦）

Conan Amok（DAIRAKUDAKAN）

TALK

「他者との関係性」熱く語る

「TERATOTERA祭り」の締めくくりはトークイベントでした。参加アーティスト６人と小川希ディレクターが、文化人類学者の上田紀行さんをゲストに招いて語り合いました。
上田さんは、自己と他者の関係性や内面的な自己成長を取り上げた『生きる意味』の著者です。本企画のテーマはまさに「価値観の異なる他者と生きる術」。祭りを終えたばかりの高揚感の中で、上田さんとアーティストたちが「他者との関係性」に焦点をあてて語り合いました。
（池田佳穂）

A Passionate Discussion on the Nature of Relationships with Others

What brought to conclusion the TERATOTERA festival was the panel discussion held by six artists and Nozomi Ogawa, the director of the festival. They welcomed Noriyuki Ueda, a cultural anthropologist.
Ueda was the author of the book "The Meaning of Being Alive" which takes up the relationship between yourself and others and introspective self-development. The very theme of this project was "the art of life with others of different values." Ueda and the artists shared a dialogue on the relationship with others during the fervor of the festival's final moments.
(Kaho Ikeda)

● お客さんと作品の関係は距離があってお客さんが鑑賞者となっている、今回はお客さんが見られる「対象」にしてみたかった。
● 作者でもないし、お客さんでもない「TERAKKO」は私にとっての宇宙人でした。

河口遥

● 狂気的な要素を含みつつ、それを言及しない。境界線スレスレなのが美術館にはないよね。だから「TERATOTERA 祭り」って面白い。
● 多種多様な価値観が混在するノイジーな空間、脳内細胞がどんどん活性化していくのが実感できた。「わたし」は一枚岩ではない、いろんな価値観が混在する対象であると思った。

上田紀行

● 小川さんからお題をもらったとき、ドナルド・トランプも難民も世の中のみんながアート好きになればいいんじゃないか?と思った。
● 最後にみんなで「アート大好き」って言ってみませんか?

田中義樹

● 私はきっかけを作るだけ。参加者が個人で決断して形作って、動かしていく。空間が明確にいきなり変わるのではなく、静かに空間が変化していくのを意識した。私にとっての involve は地殻変動のように、じわりじわりとくるもの。
● 作風は限りなく優しくありたいと思う、ただ狂気と対峙するものではない。

利部志穂

● 美術って素通りされるものが多い気がする。指示を出すことで強制的にでも involve してみたかった。
● 参加者がその空間からはじかれてしまう、それもまた involve だと思う。ただ友好的に迎え入れるだけが involve ではない。

橋本聡

● 社会情勢や心理的な危機感といったネガティブなイメージに対して、アートで何ができるのか知りたいと思い今回企画した。シリアスなものが並ぶかと思ったら、コンセプトはそれぞれ押さえつつ真逆なもので返された気持ち。やっぱりアートって面白い。
● アートって多様性って形容されるけど、アートの価値観や領域だけで語られたら多様性ではないと思っていた。だからそれぞれの手法で他領域にアプローチできる力をもつアーティストたちを集めた。

小川希

● 運営側の私もいつの間にか作品に involve されていた。各会場を回ると、異彩を放つ展示の数々が、観客に日常を考え直すきっかけを与えている印象だった。

池田佳穂
（司会 /TERATOTERA 事務局スタッフ）

TERATOSEA（テラトセア）

SOUTHEAST ASIA PROJECT

[展示]	日時：2017年2月1日（水）～5日（日）12:00～21:00 会場：Art Center Ongoing（東京都武蔵野市吉祥寺東町 1-8-7）
[アーティスト]	ターウィーパッ・プレーヌーン
[トークイベント]	日時：2017年2月5日（日）17:00～19:00 ゲスト：浅見靖仁
[滞在期間]	2016年12月13日（火）～2017年2月20日（月）

[Exhibition]	Date: 2017.2.1 (Wed.) ～ 2.5 (Sun.) 12:00 ～ 21:00 Venue: Art Center Ongoing (1-8-7 Kichijoji Higashicho, Musashinoshi, Tokyo)
[Artist]	Thawiphat Praengoen
[Talk event]	Date: 2017.2.5 (Sun.) 17:00 ～ 19:00 Guest: Yasuhito Asami
[Length of Stay]	2016.12.13 (Tue.) ～ 2017.2.20 (Mon.)

タイの作家を招いた新プロジェクト

東南アジア諸国で活躍する注目の若手アーティストを招聘し、滞在および制作、そして作品発表までをサポートする国際アートプロジェクト「TERATOSEA」が今年度から始まりました。第一弾となる今回はタイのアーティスト、ターウィーパッ・プレーヌーン（愛称：ヨド／1981年生まれ）が、日本とタイの歴史を題材とした作品を発表する展示 “Brackish Tomorrow” を開催しました。
1960年代にタイを訪問し、食糧不足の状況を目の当たりにした今上天皇（当時皇太子）は、栄養価があってタイの環境で繁殖しやすい魚「ティラピア」をタイに贈りました。それが食糧不足の改善につながり、ティラピアは現在、食卓に欠かせない魚となっています。この史実は、タイでは両国の友好を象徴するエピソードとして広く知られているそうです。
そこから、ヨドは「Brackish（汽水性）」を展示のテーマとしました。ティラピアが汽水、つまり海水と淡水が混じり合う水域でも生息可能であることを、さまざまな事象が曖昧になってしまう社会状況の隠喩としたのです。会期中には、タイの知人と Skype で語り合うイベントを実施しました。また、最終日にはタイの政治経済研究を専門とする浅見靖仁法政大学教授をゲストに迎え、制作の背景に迫るトークイベントも行われました。
（池田佳穂）

A new project inviting a artist from Thailand

TERATOSEA, an international art project which invite young artists from Southeast Asia and support to stay, create, and introduce their art work, is starting from this year. The artists invited has been performing fantastically and payed attention world widely. First project was performed by artist from Thailand named Thawiphat Praengoen (commonly called Yhod : born in 1981). The project was called "Brackish Tomorrow", it was about the history of Japan and Thailand.
When Japanese Prince (the present Emperor) visited Thailand in 1960's, he saw a situation of food shortage in there. He presented the Tilapia, a fish which as-

タイの小学校で使われる教材やテレビ映像など、
展示には多彩な素材が盛り込まれた。

sumed to be well breaded in Thailand, and that helped recovering of food shortage situation in Thailand. Moreover, Tilapia became popular that it is even eaten by many people in Thailand. This episode has been spread through Thailand as a symbol of friendship between Japan and Thailand. Yhod extract the idea of Brackish from this episode and set as the theme of his exhibition. Tilapia is able to live in Brackish water, which is a water combined of salt and fresh water, that is a metaphor for vagueness in society of variety of matter gets mixed up. During the session, we conduct an event to have skype conversation with Yhod's friend in Thailand. Also, at the last day of event, we invited Professor Asami, from Hosei University as a guest and had a talk event focused on makings and background of "Brackish Tomorrow". (Kaho Ikeda)

トークショーで浅見靖仁・法政大学教授（右から２人目）と
語り合う作家（その左）

ARTISTS' PROFILE

SOUND FES.

Aokid
アオキッド

東京造形大学映画専攻出身。ダンス作品やパフォーマンスを主に発表しながら一方でこつこつと絵や文章などを描きためて、まとめたり展示としても行う。TES などのダンスカンパニーへの参加をえて、aokid city という観客参加型パフォーマンス作品や、" どうぶつえん " というゲリラパフォーマンスイベントの企画も行っている。方法を試しては加えながら日々、変形と進化と退化の不安と希望の中にいるけど ok。

センチメンタル岡田
SENTIMENTAL OKADA

長野県出身。新宿の変態天才ピアニストの異名を持つシンガーソングライター。既婚・1 児のパパ。赤裸々な実体験をもとにした歌詞や、自身が好きな人物のテーマソングを勝手に制作したりスタイルは独特。色物と思われがちだが音楽的センスは抜群。大森靖子、ジョニー大蔵大臣などとも親交が深い。持前の運の良さで SEKAI NO OWARI やゲスの極み乙女。との共演経験もある（何故かベーシストとして）。音楽活動と並行してイラストレーター、漫画家としても活躍中。福音館書店の月刊誌「たくさんのふしぎ」巻末コーナーにこども向け音楽漫画を連載スタート。現在ウェブサイト「note」にて連載中の育児漫画「いくじなしのいくじ」は多方面から人気を博している。

ラッキーオールドサン
LUCKY OLD SUN

ナナ (Vo) と篠原良彰 (Vo,Gt) による男女ポップデュオ。ふたりともが作詞作曲を手がける。
確かなソングライティングセンスに裏打ちされたタイムレスでエヴァーグリーンなポップスを奏でる。2010 年代にポップスの復権を担うべくあらわれた、今後さらなる注目が集まること必至な期待のニューカマー。

宇治野宗輝
UJINO

大量消費社会における「物質文明のリサーチ」として、90 年代からサウンドスカルプチャーを制作。国内外で展覧会、パフォーマンスを行っている。
2016 年 個展「Rotate 'n' Roll Over」山本現代（東京）
2016 年「The 10th Anniversary of Nam June Paik」ナム・ジュン・パイク・アートセンター（韓国）
2016 年「MASH UP」バンクーバー美術館（カナダ）
2013 年 個展:「ポップ／ライフ」彫刻の森美術館（神奈川）
2010 年「六本木クロッシング 2010 展: 芸術は可能か？」森美術館（東京）

川村 美紀子
MIKIKO KAWAMURA

1990 年生まれ、16 歳からダンスを始める。「どこからかの惑星から落下してきたようなダンス界のアンファン・テリブル」（Dance New Air 2014/ 石井達朗氏）とも紹介されるその活動は、劇場にとどまらず、屋外やライブイベントでのパフォーマンス、映像制作、弾き語りライブ、自作品の音楽制作、レース編みなど多彩に展開。2013-16 年度 (公財) セゾン文化財団ジュニア・フェロー。http://kawamuramikiko.com/

ＨＩＫＯ
ヒコ

国内外で活動中のＰＵＮＫバンド「ＧＡＵＺＥ」のドラマー。その活動と並行し、「あらゆる芸術の最も攻撃的な部分」、「通常の街中で出くわす神経逆立てる音、モノ」と、自身のドラミングとによる「ハードコア的パフォーマンス」を標榜し、アクセル音を鳴らしまくる暴走族、右翼街宣車の爆音ＢＧＭ、サンドバッグを殴り続ける空手家、宙づりになって踊るストリッパー等との共演多数。

暮らすアート

いちむらみさこ
MISAKO ICHIMURA

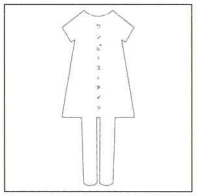
2003 年から東京の公園のブルーテント村に住み始め、同じテント村住人の小川てつオと一緒に物々交換カフェ・エノアールと絵を描く会を開いている。2007 年にホームレスの女性たちのグループ「ノラ」を立ちあげる。国内外で、資本主義の問題や反ジェントリフィケーション、フェミニズムなどに関連する発表を行っている。 現在、反オリンピックの活動を展開中。著書に「Dear キクチさん、ブルーテント村とチョコレート」(キョートット出版、2006 年)。

奥山理子
RIKO OKUYAMA

1986 年生まれ。母の障害者支援施設みずのき施設長就任に伴い、12 歳よりしばしば休日をみずのきで過ごす。2007 年以降の法人主催のアートプロジェクトや、みずのきの農園活動にボランティア

で従事した後、2012 年みずのき美術館の立ち上げに携わり、現在企画運営を担う。
企画、制作した主な展覧会に「ayubune 舟を作る」（2014 年）、「TURN ／陸から海へ (ひとがはじめからもっている力)」（2014-2015 年）、「共生の芸術展『DOOR』」（京都府委託事業、2014 年、2015 年）、「みんなのアート - それぞれのらしさ -」（岐阜市委託事業、2015 年、2016 年）など。2015 年より、東京オリンピック・パラリンピックにおける文化プログラムの展開に向けた東京都のモデル事業「TURN」のコーディネーターを務める。

米田年範
TOSHINORI YONETA



1981 年北海道生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業、文化ファッション大学院大学修了。2012 年、アーティストとの展示をきっかけに、アーティストの作品をより身近なものにする事をコンセプトとして、ワンピースとタイツを立ち上げる。2015 年ラフォーレ原宿店オープン。2016 年 9 月にギャラリーを併設した高松店をオープン。

西荻映像祭

秋山由希
YUKI AKIYAMA

“ 人という存在と様々な関係 ” を主題とし、コミュニケーションと様々な言語やシステムを用いた映像作品を制作する。ビデオというメディアにおける「撮影者、被写体、観覧者の関係性」や、「視覚的・時間的構成や編集によってつくられる様々な次元」をベースに、肉体的・精神的共生と存在、それらとシステムの関係性を考察している。

キュンチョメ
KYUN-CHOME

2011 年から活動している男女のアートユニット。メンバーはホンマエリとナブチ。震災、原発事故、自殺、難民問題等が起こるシリアスな現場に詩的な行動やユーモアで切り込んでいく。

林千歩
CHIHO HAYASHI

美術家。東京藝術大学油画科博士課程に在籍。過度なメイクを施した自身の身体を表象とし、様々なキャラクターに扮した自らを演ずる。無意識下を伏流するオブセッションに貫かれた諸相に、変身、あるいは脱皮が展開される。
映像を中心に写真・立体・平面・ダンス・パフォーマンスなど様々なメディアに展開する。
主な展覧会に、個展「パパ、ごめんなさい」（Art Center Ongoing/ 東京 /2014）、「牛窓・亜細亜藝術交流祭」（岡山 /2014）、「島からのまなざし」（東京都美術館・TWS/ 東京 /2014）、「瀬戸内国際芸術祭」（小豆島 /2013）、会田誠展「天才でごめんなさい」にてパフォーマンス (森美術館 / 東京 /2012-13)、会田誠「美術であろうとなかろうと」展（TWS 本郷 / 東京 /2011）他多数。

TERATOTERA 祭り

淺井裕介
YUSUKE ASAI

1981 年東京都生まれ。絵描き。テープ、ペン、土、埃、葉っぱ、道路用白線素材など身の回りの素材を用いて、キャンバスに限らず角砂糖の包み紙や紙ナプキンへのドローイング、泥や白線を使った巨大な壁画や地上絵のシリーズまで、あらゆる場所と共に奔放に絵画を制作する。

阿目虎南（大駱駝艦）
CONAN　AMOK

1987 年埼玉県出身。2008 年大駱駝艦に入艦、麿赤兒に師事。以降、舞台・映像など幅広く活動。主な出演作品に「進撃の巨人」(樋口正嗣監督 /2015 年)、「過激派オペラ」(江本純子監督 /2016 年)、「金閣寺」(宮本亜門演出 /2014 年 4 月 / 赤坂 ACT シアター)、「大逆走」(赤堀雅秋演出 /2015 年 10~11 月 / Bunkamura シアターコクーン、森の宮ピロティホール) などがある。また、「オフェリアと影の一座」(小野寺修二演出、2016 年 11 ～ 12 月、東京芸術劇場) に出演。

上田紀行
NORIYUKI UEDA

文化人類学者。医学博士。東京工業大学教授。リベラルアーツ研究教育院長。1958 年、東京都生まれ。東京大学大学院文化人類専攻博士課程修了。86 年よりスリランカで民俗仏教の治療儀礼「悪魔払い」のフィールドワーク調査を行い、「癒し」という言葉を初めて日本社会に提示する。日本社会の生きづらさとそこからの解放を提示した『生きる意味』（岩波新書）は 2006 年度大学入試出題数第 1 位となり、数社の高校国語教科書にも掲載されている。著書

『がんばれ仏教！』（ＮＨＫブックス）では、日本の伝統仏教の復興の道を模索し、ダライ・ラマとの対談も出版する。（『目覚めよ仏教！—ダライ・ラマとの対話』NHKブックス、『ダライ・ラマとの対話』講談社文庫）。東工大においては学生からの授業評価第１位となり、「東工大教育賞・最優秀賞」を受賞するほか、リベラルアーツ教育改革の中心を担っている。その他の著書に、『かけがえのない人間』（講談社現代新書）、『慈悲の怒り一震災後を生きる心のマネジメント』（朝日新聞出版）、『人生の〈逃げ場〉　会社だけの生活に行き詰まっている人へ 』(朝日新書)。最近著は『人間らしさ　文明、宗教、科学から考える』（角川新書）。

うらあやか
URAAYAKA

1992 年生まれ、武蔵野美術大学油絵学科卒業。相反する物事（例えば大勢とひとりぼっち、見る側と見られる側、過去と現在等）を反転もしくは攪拌する装置としての作品を目指す。主なグループ展に TDW ASIA AWARD (新宿御苑 2014 年 東京)、TERATOTERA 祭り (三鷹 2015 年 東京)、アート市原秋 (旧里見小学校 2015 年 千葉)、PARTY(Art Center Ongoing 2016 年 東京) など。urayaka.jimdo.com

遠藤一郎
ICHIRO ENDO

未来美術家。1979 年静岡県生まれ。未来へ号ドライバー、カッパ師匠、DJ じゃみへんさん、island JAPAN プロデューサー、GO FOR FUTURE、from HELL。出会った人々が車体に「夢」を寄せ書きしていく『未来へ号バス』に乗って全国を巡る車上生活者。アートイベントなどで展示やパフォーマンスをおこなう。凧あげプロジェクト「未来龍大空凧」を各地で開催。日本列島にメッセージを描く「RAINBOW JAPAN」。カッパに扮して出没する「カッパ師匠」。微生物と電子による特殊農業「富士山マグマ農場」などのプロジェクトを進行中。

利部志穂
SHIHO KAGABU

サンライズサーファー。様々な場所や廃材・日用品・動植物を組み替えることによるインスタレーションをはじめ、映像作品。パフォーマンス。言葉や音。人と事物が関わる変化、空間全体を巻き込んだ時と世界を展開する。1981 年生まれ。主な展示「サンライズサーファー」（KAYOKOYUKI、東京、2016）、「引込線」（埼玉、2015）、「KAKEHASHI Project」Japan Society（ニューヨーク、2014）、「アーティスト・ファイル 2013 ー現代の作家たち」（国立新美術館）、「タマがわ、たった火」実家 JIKKA / NADiff window gallery（東京、2014）、「VOCA 展 2010」上野の森美術館（東京、2010）、「公開制作 51 “ 返る 見る 彼は、川を渡り、仕事へ向かう ”」（府中市美術館、2010）、「back to the drawing board」geh8（ドイツ、2010）、“data and vision”(AKI Gallery/Taipei,TAIWAN) 他。http://kagabu.com

河口遥
HARUKA KAWAGUCHI

パフォーマンスやワークショップ（パン生地による塑像、首を絞めあった後にサンドイッチをつくる等）を表現方法とする。近作発表に参加したグループ展に「そんな目でみる」（モデルルーム ,2015 年）。現在移転中の 22:00 画廊（http://2200gallery.com）オーナー。2016 年より横浜のオルタナティブスペース blanClass（http://blanclass.com）にて企画も担当している。

渋谷サイファー
SHIBUYA CYPHER

東京・渋谷の TSUTAYA 前を拠点に即興セッションを開催する渋谷サイファー。リーダーの ACE を筆頭にドラムやギターなど多彩なメンバーで構成されている。彼らのコラボレーションはストリートパフォーマンスとは思えないほど、レベル高いフリースタイルバトルを繰り広げている。その世界観はラッパー同士の自己完結に終わらず、周囲をどんどん巻き込んでいく路上ライブとしての側面も持ち合わせている。今後も目が離せない、路上発の音楽集団。

田中義樹
YOSHIKI TANAKA

1995 年三重県生まれ。武蔵野美術大学彫刻学科在学中。社会に対してのやるせない気持ちをもとに、やれるだけ派手で少し笑えるような感じの作品を作り続ける。立体 / 映像 / 絵 / 演劇 / インスタレーションなど、表現の幅は広い。主なグループ展に、2015 年 TERATOTERA 祭りプレイベント「一富士・三鷹・パンまつり」（三鷹）、OngoingXmas（Art Center Ongoing)、2016 年 Art Program Run!(アートラボはしもと)。主な個展に、2015 年「週刊パブリックアートシリーズ」として、パンケーキ in 原宿 (原宿駅前)、駐輪場関ヶ原 (小平中央公園)、Retweet(国会議事堂前)、2016 年 Shooting Star!（ジョイナス鷹の台）などがある

蜻蛉 -TONBO-
トンボ

TRACKMAKER/COMPOSER として CM 音源制作行いつつ、都内各所の CLUB で Degital Live Set を披露。弾き語りやバンドセッションへの参加など、持ち前の好奇心とフレッシュさを保ちながら、様々なアーティストとの交流を夜な夜な繰り返し、日々向上する音の抱擁。乱痴

気大騒動 蜻蛉祭主催。毎月第２火曜日【BRAIN WAXXX】を “WURAFU LABEL” と共に青山蜂にて開催中。https://soundcloud.com/djtonbo

永畑智大
TOMOHIRO NAGAHATA

マンガ彫刻家。1983 年東京都生まれ。2010 年武蔵野美術大学彫刻学科卒業。彫刻、漫画、国立奥多摩美術館を中心に活動中。ファミリーレストラン名義で青林工藝社第 18 回アックスまんが新人賞特別賞受賞。
主な個展に、2015 年「It's OK」PS2 ギャラリー / 北アイルランド・ベルファスト、2015 年「森林組合セクシーポテンシャル」Art Center Ongoing/ 吉祥寺などがある。

橋本聡
SATOSHI HASHIMOTO

1977 年生まれ。《偽名》（『14 の夕べ』東京国立近代美術館，2012）、《PPPPPPPPPPP》（『NEO 公共』TERATOTERA, 2012）、《私はレオナルド・ダ・ヴィンチでした。魂を売ります。天国を売ります。》（青山｜目黒，2013）、《国家、骰子、指示、》（Daiwa Foundation, ロンドン，2014）、《MOT アニュアル 2016 キセイノセイキ》（東京都現代美術館，2016）、《全てと他》（LISTE, バーゼル，2016）、《未来芸術家列伝 IV》（東京，2017）など。

ハンバーグ隊
Thanks-Thai

2015 年結成。
赤いカレー隊、ハンバーグ隊、ノイズバンドさわやかチーズカレーディッシュはドンキーびっくりには置いていません、の選抜メンバーでぷらぷらしてます。
2015 年結成。
赤いカレー隊、ハンバーグ隊、ノイズバンドさわやかチーズカレーディッシュはドンキーびっくりには置いていません、の選抜メンバーでぷらぷらしてます。

BATIC
ベイティック

1992 年生。2014 年 4 月より都内にて活動をスタートし、同年末、アルバム ”meeting the organism” を発表。街の音の拡大とそこに広がる有機性をテーマにフィールドサンプリングをベースとした楽曲制作を行う。ミニマムな編成を得意とし、そのグルーヴは自身のルーツであるブラジルの古典音楽の影響を色濃く残している。
自身の楽曲発表に加え、他アーティストのミックス、編曲、また、家具ブランドやファッションブランドへの楽曲制作提供、また、サウンドインスタレーションの国内展示会への出展など活躍の場を広げている。また、ermhoi のミックスも手掛ける。サイドワークにて、東京大学指揮作曲研究室にて fNIRS を使用した音楽コンテンツに対する脳の反応のモデル化に取り組む。

東野哲史
TETSUSHI HIGASHINO

1976 年滋賀県生まれ。東京在住。1999 年武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科卒業。非生産的生産活動という名目のもと、日常の取るに足らないものごとや単なる思いつきに対してのレスポンスを制作の起点として、インスタレーション、ビデオ、Web、パフォーマンスなど、メディアを問わず展開する。 個展に「滝川」Art Center Ongoing（東京）、グループ展に「スーパー再開」Studio Kura（福岡）、「Garbage」Goriski Muzej Kromberk（スロベニア）など多数。

TERATOSEA

Thawiphat Praengoen
ターウィーパッ・プレーヌーン

1981 年 10 月 8 日生まれ。チェンマイ大学 臨床心理学で学士。チェンマイ大学 メディアアートデザインで修士を取得。タイの情勢や社会構造をテーマに、ユーモアかつ風刺的なエッセンスを入れたパフォーマンスやビデオドキュメンタリー、ライブなどを企画制作。

浅見靖仁
YASUHITO ASAMI

1984 年東京大学教養学部卒業。1988 年タイ・タマサート大学大学院経済学研究科修士課程修了。2015 年 3 月まで一橋大学大学院社会学研究科教授。2015 年 4 月より法政大学法学部国際政治学科教授。2015 年 4 月より日本タイ学会会長。専門は、タイをはじめとする東南アジアの政治経済。

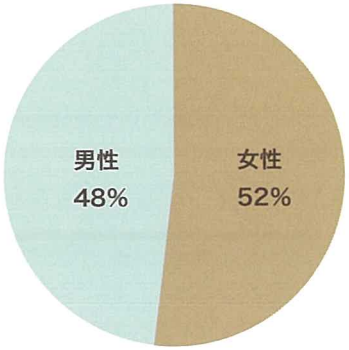
2016 年度アンケート集計

SUMMARY OF QUESTIONNAIRE

アンケート結果は、今後の TERATOTERA の広報戦略や活動に生かしていきます。また、中央線沿線という様々なカルチャーや幅広い年齢層がいるエリアの声を収集することは TERATOTERA だけではなく、その他アートプロジェクトにとっても参考になればと思います。

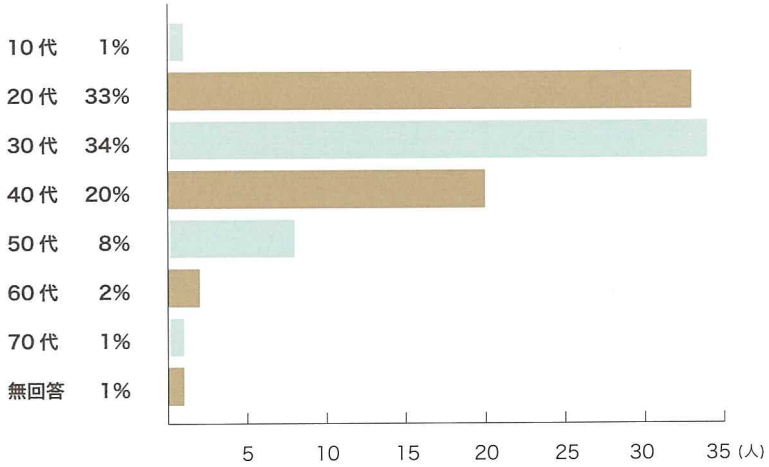
Q1 性別

全体では女性の方が若干多い結果となりました。TERATOTERA 祭りでは女性の割合がさらに高く、西荻映像祭では男性の割合が高い傾向がありました。コンテンツやテーマによって男女比率は変わるようです。



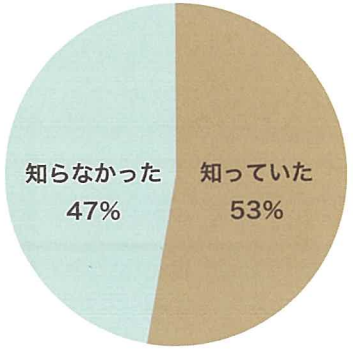
Q2 年代

20-30 代が最も多い結果となりました。TERATOTERA 祭りではファミリー層が多く来場され、30 代が 30%を超えました。



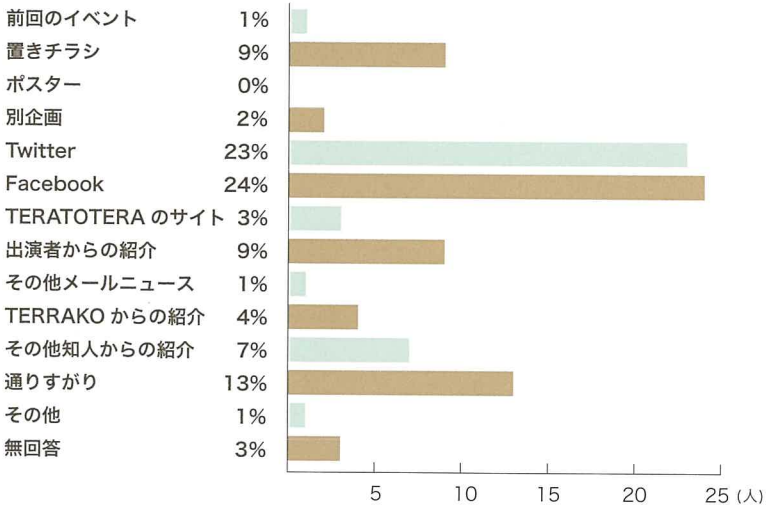
Q3 TERATOTERA をもともと知っていたか

知らなかった方が約半数いることから、事前のイベント広報や TERATOTERA の活動発信に今後も注力すべきだと思います。



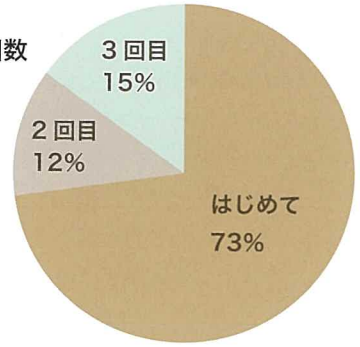
Q4 本イベントは何を通じて知ったか

Facebook や Twitter の投稿がきっかけでご参加される方が半数を超え、SNS の広報が有効的でした。通りすがりが 10%程度であることから、目的をもってご来場される方が大半だと推測できます。また TERATOTERA 祭りでは出演者や TERAKKO、知人からの紹介でご来場される方が 20%を超えており、人的ネットワークの広報効果も期待できます。



Q5 TERATOTERA の参加回数

リピーターの割合が約 30%と、これまでより少ない結果となりました。イベント毎に参加されるアーティストが異なることが一要因となっているようです。



Q6 来場者の感想

ポジティブ

- 素っ気ない空間を豊かに演出しているのがよかった。
  (TERATOTERA 祭り)
- 駅前でマップを頂いたり、手が空いているスタッフに案内してもらったり。
  人生初の「三鷹」のイメージがアップしました。
  街並みも初めて見る物でびっくりです。
  (TERATOTERA 祭り)
- あの場所は風を感じながら音楽を聴くのに適した場所だと思いました。
  (SOUND FES.)
- ビリヤード台に置いてあった作品が良く出来ていて面白かったです、
  グロいけどシュールでかわいい世界観が好きです。
  (西荻映像祭)
- 消費・流通・システムとアートの関係について、
  三人それぞれ異なったニュアンスをお持ちで、
  とてもバランスが取れていて、楽しかったです！
  (暮らすアート)
- 制作背景だけでなくタイの政治情勢を知ることができた。期待以上に面白かった。
  ゲストの先生との相乗効果でかなり奥深い内容でした！
  (TERATOSEA トーク)

ネガティブ

- 看板がもう少しわかりやすいところに置いてあるとありがたい。
  (TERATOTERA 祭り)
- たばこのにおいがダメなのでホストクラブ行けず残念。
  (TERATOTERA 祭り)
- 場の力がある所だったが作品全体のコンセプトが伝わってこなかった。
  (西荻映像祭)

TERAKKO の感想

TERAKKO'S VOICE

街中での展覧会、トークイベント、ライブ等、その企画・運営をボランティアスタッフの TERAKKO が中心となって進めています。その活動内容は、アーティストの作品制作補助、イベント当日の運営、記録管理など多岐に渡ります。月に１度、企画の進行について話し合ったり、ゲストアーティストを招いて活動内容を伺う会議「テラッコ屋」も開催しています。デザイナー、システムエンジニア、主婦、学生など年齢や経歴も様々な方たちが１つのプロジェクトを実現すべく協働しています。３人の TERAKKO のコメントから活動を紹介します。

TERATOTERA のある街のひとたちが羨ましい

都賀田一馬

TERAKKO として２年目になりますが、この間に出会えたトークイベントやライブ、作品の一つ一つはもちろん、TERAKKO 仲間や街の人たち、観客のみなさんから、自分でも驚くほど影響を受けています。
ものの見え方、考え方、感じ方。いつも心を動かされます。
そして、この経験をしてしまうと、どうしてもみんなにその楽しさを知ってもらいたくなるんです。
アートに興味がある人もない人も、子どもにも若者にもおじちゃんおばちゃんにも。

▲カッパに扮して街を歩く

特に、駅でチラシを配るときに感じる、一切周りを見る余裕もない表情の硬い足早な人。
「ちょっといつもと違う世界も覗いてみれば。悪くないよ」と心の中で呟きます。
SOUND FES. や TERATOTERA 祭りが行われる街は、本当に羨ましい。
この街にいるだけで、通りすがりに、身近な場所で巻き込まれてしまうんですよ。
気付いていないかもしれないけれど、そんな街に住んでいる人は、それがない街の人とはきっと何かが違うはず。
アートに興味を持って、自らギャラリーに足を運んで、五感を開いて作品の声を聴くのもいいけれど、日常の街なかで、勝手に向こうから語りかけてくる、時にズカズカ入り込んでくる。そんな作品に出会うのもかなり好きです。
それに出会っちゃった街の人たちを見るのがまた、さらに好きなんです。
どうしよう、たぶん、TERAKKO やめられないなぁ。

渋谷の IT 企業に勤める若手営業マンが アートの団体に参加して驚いたこと

浪江航一

小劇場が好きで、たまたま昨年の TERATOTERA 祭りでの演劇作品を見に行ったことをきっかけに TERATOTERA の存在を知りました。アートを通じたエリアの活性化と小劇場以外のアート作品も知りたいという思いから TERAKKO になってみたのですが、実際にやってみると驚きの連続でした。
まず、アーティストと協働するのは大変だということ。TERAKKO には、実際の制作過程からアーティストと関わりを持つ機会が意外にも多くあるのですが、とにかく無茶ぶりが多く、体を使います。本屋にある本棚を終電ギリギリまで出し入れしたり、カッパの格好をしたり、展示会場でひたすら石を蹴り続けたり。中には宇宙人のような格好をして、期間中は来場者に質問を投げ続ける TERAKKO もいました。はちゃめちゃです。
ただ、普段はデジタルな仕事をしている自分にとっては、これらの活動は全くもってアナログな活動ではあるものの、いつもは使っていない頭と体を使ったからか、なんだか心地よいものでした。

アーティストが作品を通じて見せる世界観にも純粋に驚かされっぱなしでした。例えばひとつの針の穴を度の違ったメガネをかけた人同士で糸を通し合うことこそが、世界の縮図だと主張し映像作品をつくるアーティストのお手伝いをした時は、なんで自分はこんなことしているのだろうと意味不明な気分になることが時折ありました。アーティストと深く関わったからこそわかるTERAKKOならではの醍醐味だなと今振り返ると感じます。

▲展示会場で一本足打法を披露

TERAKKOの活動は、とにかく驚きの連続です。やたらお酒が好きな事務局の方がいたり、仕事そっちのけでTERATOTERAの活動にハマる方もいたり、アーティスト以上に変な方がTERAKKOには多いです。お酒とアートが好きで、ハードコアなアート体験をしてみたいのであればTERATOTERAほど適した団体はないかなと思います。

現代アートは謎だらけ、でも楽しい

増子千博

ある日、私は「ネットTAM」（アートマネージメント情報サイト）のTERATOTERAの募集を見てなんとなく参加してみることにしてみました。

説明会や会議での小川さん(ディレクター)の説明はとても分かりやすく、ちょっと謎な現代アートに興味を持ちました。…が、多くの方が参加されていて、若干人見知りな私は、こんな中で参加できるか少し不安なまま「SOUND FES.」に参加することになったのでした。

「SOUND FES.」の準備に行くと、なんやらかんやらで私は写真を撮る係になりました。

カメラはまったくの初心者で何の知識もないのですが、中央線の高架下で重い一眼レフを首から下げ、カメラマン気取りで写真を夢中で撮った記憶があります。

アーティストさんたちは皆個性的で面白かったのですが、なかでもAokidさんが印象に残っています。住宅街で海パンだけで踊れるのはAokidさんのかわいらしさあってのものだなと思いました。

イベントに参加してみると、TERATOTERAの方たちは最初の印象よりも思ったよりやさしくて楽しく参加することができました。

そして大きなイベントとなる「TERATOTERA祭り」では主に淺井裕介さんの泥絵の作品の前でチラシ配りをお手伝いしていました。泥絵はすべて泥で描いていて、きれいなオレンジの色はまるで絵の具で描いたのかと思うほど鮮やかでしたが、土そのものの色で描いていたことに驚きました。手形を動物の形にしていて、今にもはばたいていきそうでした。

河口遥さんの宇宙人は、実際に体験はできませんでしたが、淺井さんのところでチラシを配っているときに前の人を探している方が何回か探しに来られていました。その方は、何度探し回っても結局会うことはありませんでした。かと思えば、メールで届いた連絡では別の方は前の人と会うことができたそうです。すっと会える人もいれば一生会えない人もいるのだなと思い、感慨深く思いました。

TERATOTERAのイベントに参加してこんなに多くのアーティストの方やTERAKKO、イベントに参加して下さった方等に会えたことには大変感謝しています。最後まで楽しく参加できてよかったです。

▶宇宙人の扮装で作家と記念撮影

今、本当に必要なアートプロジェクトとはなにか？
アートプロジェクトのノウハウを本気で学べる連続講座

アートプロジェクトの0123（オイッチニーサン）

INTRODUCTION TO ART PROJECT

日時：2016年7月8日（金）～2017年3月3日（金）
20:00～22:00 原則隔週金曜日 全17回

第1回 7月8日（金）	第9回 11月4日（金）
第2回 7月22日（金）	第10回 11月18日（金）
第3回 8月5日（金）	第11回 12月2日（金）
第4回 8月19日（金）	第12回 12月16日（金）
第5回 9月2日（金）	第13回 1月6日（金）
第6回 9月17日（土）	第14回 1月20日（金）
第7回 10月8日（土）、10月9日（日）、10月10日（月・祝）	第15回 2月3日（金）
	第16回 2月17日（金）
第8回 10月21日（金）	第17回 3月3日（金）

会場：吉祥寺 グランキオスク
（東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-33-10 丸二ビル 2F）
コーディネーター：小川希
ゲスト：遠藤一郎、小鷹拓郎、松本哉、福住廉、服部浩之、芹沢高志、佐脇三乃里

Date：2016.7.8(Fri.) ～ 2017.3.3(Fri.)
20:00～22:00
Venue：Kichijoji Grand Kiosk
(1-33-10, Maruni Bldg, Kichijoji Honcho, Musashinoshi,Tokyo)
Coodinator：Nozomu Ogawa
Guest：Ichiro Endo,Takuro Kotaka, Hajime Matsumoto, Ren Fukuzumi, Hiroyuki Hattori, Takashi Serizawa, Minori Sawaki

隔週金曜日の夜、吉祥寺のカフェで「アートプロジェクトの0123」が開かれました。アートプロジェクトについて学ぶ講座ですが、多彩なゲストによる授業は、美術史からアートプロジェクトの現場や美術評論の書き方まで広範なテーマを扱いました。ときには、アーティストのぶっちゃけトークもあり、内容の濃い講座となりました。
授業形態はゲスト講師が語るだけでなく、ゲストや受講者とのディスカッションもあります。受講者は講座を通して、知識だけでなく、アートについての思考も深めていきました。さらには、TERATOTERA祭りにボランティアスタッフとして参加し、アートプロジェクトの現場を経験。いわばインプットからアウトプットまでを一貫して学べる講座となりました。

Every other Friday night, “Introduction to Art Project” was held at a café in Kichijo-ji. This was a lecture of art project 101. Diverse guests talked on a range of topics from art history to the actual situation of the art project and the way to write an aesthetical critique, all of which were rich in content, including the off-air topics.
Participants actively joined the talks held by the guests and those discussions cultivated not only their own knowledge but also their understanding towards art. Furthermore, they were involved in the festival as volunteers and experienced the actual situation of an art project. This course was a means through which participants could consistently gain knowledge and apply it to an actual situation.

	講座内容
第１回	**イントロダクション**
第２回	**コンセプチュアルアート１** マルセル・デュシャンを祖とするコンセプチュアルアートの歴史を学びました。
第３回	**コンセプチュアルアート２** **講師：遠藤一郎**（未来美術家） 遠藤さんが今注力している「富士山マグマ農場」についてお話を伺いました。
第４回	**映像表現とインスタレーション１** 映像表現やインスタレーションの歴史を代表的な作品を見ながら詳察しました。
第５回	**映像表現とインスタレーション２** **講師：小鷹拓郎**（アーティスト） 自身のインスタレーション作品や、「国立奥多摩美術館」のご紹介をしていただきました。
第６回	**アートプロジェクトの運営を知る** 「TERATOTERA」のボランティアスタッフの会議「テラッコ屋」に参加。プロジェクトの進行手順を学びました。
第７回	**アートプロジェクトに参加する** 「TERATOTERA 祭り 2016」に運営スタッフとして参加し、実際の現場を体感しました。
第８回	**東南アジアのアートの動き１** 小川による東南アジアリサーチのエピソードを通し、現地の状況を垣間見ました。
第９回	**東南アジアのアートの動き２** **講師：松本哉**（素人の乱） 松本さんのアテンドで高円寺をフィールドワーク。「NoLimit 東京自治区」や東南アジアのオルタナティブスペースについてお聞きしました。
第10回 第11回 第12回	**作品評論の作法、展覧会で作品の評論を行う** **講師：福住廉**（美術評論家） 展覧会の感想文を福住さんにリライトしていただき、基本的な文章の書き方や、読む人への伝え方についてのレクチャーを受けました。
第13回	**キュレーターの活動を知る** **講師：服部浩之**（インディペンデント・キュレーター） 数々の芸術祭を牽引されている服部さんに、キュレーターの視点からアートプロジェクトについてお話を伺いました。
第14回	**アートディレクターの活動を知る** **講師：芹沢高志**（P3 art and environment 統括ディレクター） ディレクターを務められたさいたまトリエンナーレの現場の状況やコンセプトについてお聞きしました。
第15回	**アートディレクターの活動を知る** **講師：佐脇三乃里**（認定 NPO 法人黄金町エリアマネジメントセンター　アシスタントディレクター） 「黄金町バザール」や、アーティスト・イン・レジデンスの運営についてお話を伺いました。
第16回 第17回	**受講生によるアートプロジェクトの企画発表** 各々の考える実施してみたい企画について発表しました。

美術評論家・福住廉さんから
文章の書き方の基本を学びました。

キュレーターの服部浩之さんに
あいちトリエンナーレについて
お話を伺いました。

ディレクターの芹沢高志さんに、
さいたまトリエンナーレについて
お話を伺いました。

松本哉さんが運営している
ゲストハウスなど、
高円寺の面白い場所を
案内していただきました。

「TERATOTERA 祭り」に
スタッフとして参加。

アートの現場で必要とされる英語表現を
7ヶ月間でモノにする連続講座

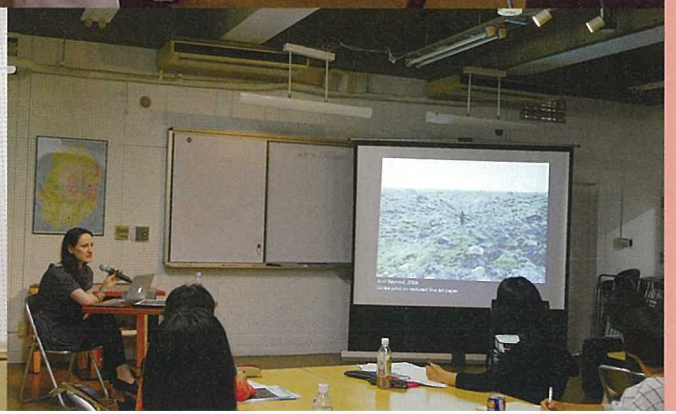
TERA English

日時：　初級クラス・隔週水曜日　全15回
2016年7月13日（水）～2017年3月8日（水）
中級クラス / 隔週水曜日　全15回
2016年7月20日（水）～2017年2月15日（水）
上級クラス / 隔週木曜日　全15回
2016年7月7日（木）～2017年3月1日（木）
会場：　アーツカウンシル東京 ROOM302
（東京都千代田区外神田6-11-14 アーツ千代田3331 3F）
講師：　弘川有希絵、本村桜アリス

Date：　Biginners Class / Every Other Wednesday /15 Classes Total
2016.7.13（Wed.）～2017.2.8（Wed.）
Intermediate Class / Every Other Wednesday /15 Classes Total
2016.7.20（Wed.）～2017.2.15（Wed.）
Advanced Class / Every Other Thursday /15 Classes Total
2016.7.7（Thu.）～2017.1.26（Thu.）
Venue：　Arts Council Tokyo Room302
(3331 Arts Chiyoda 3F, 6-11-14,Sotokanda, Chiyodaku,Tokyo)
Teachers：　Yukie Hirokawa, Sakura Alice Motomura

海外のアーティストが頻繁に来日する一方、国内のアーティストが海外のレジデンスプログラムやイベントに参加するなど、アートの世界はグローバルです。そうした状況に備える英語講座が「TERA English」です。アート作品の説明や現場で必要となる会話など、様々なシチュエーションを想定して英語のインプットとアウトプットを繰り返していきます。ときには海外アーティストをゲストに迎えたトークもありました。
受講者の英語力のレベルや学習目的に応じて初級、中級、上級の3クラスを設定。今年から始まった上級では、ネイティブの講師による授業と受講者によるプレゼンテーションをメインに、より実践的な英語修得を目指しました。

The world of art is not an exception in this ongoing process of globalization -while international artists frequently come to Japan, domestic artists are also selected to join residence programs abroad. To address this situation, the class “TERA English” was designed to equip artists with an adequate English language ability. The class curriculum was mainly structured towards both memorizing and expressing how best to explain their oeuvres in English. Occasionally international artists came to give a talk in the classes.
The classes were divided into three levels in accordance with participant’s English ability and purpose of study. An advanced class began from this year, in which students focused on the acquisition of practical English by giving a presentation supported by a native English speaker.



おわりに

新たな「景色」と出合った日々

今年度１年間の活動を振り返ってみると「今どのような国、日常、また関係性の中で生きているのか」を、すべてのプロジェクトを通して考えていたように思います。

暮らしの中でアートがどう機能するのか、三者三様のお話を伺ったトークイベント「暮らすアート」、“価値観の異なる他者と生きる術”というテーマを掲げ、すべての作品を参加型とした「TERATOTERA 祭り」。そして、今年度初めて実施した国際交流プログラム「TERATOSEA」では、外国の情勢にも思いを巡らせることとなりました。

特に印象的だったのは「TERATOSEA」。タイから招聘したアーティストのターウィーパッ・プレーヌーン（愛称ヨド）さんから、現地の生活について、たくさんの話を聞くことができました。ティッシュ箱やカレンダー、CM などに国王の肖像が使用されている、タイの日常。同じ時代にある全く異なる生活の風景を、彼の経験から生まれたリアルな言葉を通して想像しました。

作品の制作過程で思いもよらなかった境遇や考えに触れ、互いの状況を考えることができるのは、アート、そして TERATOTERA の素晴らしいところだと思います。それは違う国に生まれ育ったヨドさんだけでなく、仕事や学業に励みながら参加してくれている TERAKKO と、これまでの経験や今の思考を話すことも、それぞれにわたしの視野を広げてくれました。

来年度はどんな TERAKKO、アーティストが参加してくれるのか、そしてどんな景色を見せてくれるだろう。その出会いをとても楽しみにしています。今後もこの体験を、来場者を含め、このプロジェクトに関わってくれるすべての方に、少しでも共有していけたら幸いです。

最後に、今年度、企画を現実のものとしてくれた TERAKKO、活動にお力添えいただいた地域の皆様、そして日常の中に見たことのない作品を生み出してくれたアーティストたちに、心から感謝します。

事務局長
髙村瑞世

EPILOGUE

Days of the Chance Encounter to a New "Scenery"

Reflecting on the work of this year, I feel I have questioned "in what kind of country, what sort of everyday life, and which types of relationship I live" throughout all the projects.
"Art of Living," the panel discussion with three different individuals about how art can function in everyday life. "The Art with Others of Different Values" was centered in the wholly participatory "TERATOTERA Festival." Also, our first trial of international cultural exchange program "TERATOSEA" urged us to think of the situations of other countries.
The most impressive grapple was "TERATOSEA." The Thai artist Thawiphat Praengoen (Yhod) told us a lot about life in Thailand. From tissue boxes and calendars to advertisement, everyday life in Thailand is pervaded by the face of the King. We were able to imagine a different life from ours in the same era through his lively words born of experience.
Touching unexpected ideas and environments in a work's creative process is a virtue of art and TERATOTERA. This experience was contributed not only by Yhod, who was born and raised in a different country, but also by TERAKKO whose work and study was stimulated while participating in the project. The conversation with them on their past experiences and current ideas opened a new horizon for me.
What artists and TERAKKO will join the festival next year? What scenery can I see next year? I am truly looking forward to these encounters. Hopefully this experience was at least in part shared by all the participants, including audience and staff of this project.
Finally, I would like to sincerely thank the TERAKKO who realized this project from mere conception, the supportive residents in the festival areas, and all of the artists who showed us unseen works in everyday life.

The Secretary General
Mizuyo Takamura

■ **ディレクター**
小川希

■ **事務局長**
髙村瑞世

■ **事務局スタッフ**
阿部葉子、池田佳穂

■ **地域連携チーム（広報の配布リスト・スケジュール管理、地域連携方法の考察）**
梅澤光由、粟生哲也、橋口聡美、根岸菜奈、荒木友太、都賀田一馬、佐藤卓也、佐藤かな、石川太一、石川玲子

■ **記録チーム（各イベントのビデオ・写真撮影、トークイベントの文字起こし、記録冊子の掲載情報管理）**
荒木友太、千葉佐奈子、西岡一正、増子千博、佐藤卓也、小西佐和

■ **西荻レヂデンスチーム（作家との作品プラン調整、作品制作補助、当日運営補助）**
吉田絵美、神山綾子、立山周一郎、榎戸杏子、浪江航一、小山里実、三浦留美

■ **SOUND FES. チーム（出演者との調整、当日運営補助）**
伊藤亜紀子、佐久間考彰、梅澤光由、遠山尚江、清水千恵里

■ **TERATOTERA 祭り（運営）**
上記全員と、阿部満世、手塚美希、杢田知美、野村はる、塚田瞭、川上遥香、栗原麻緒、山崎茉奈、大竹優輝、岩尾庄一郎、森田優子、福家由美子、村上朋、田中美紗斗、林真実、矢部有実子、岩尾一輝、菅原みのり、伊澤文彦、杉崎萌里、鶴見香月、加藤唯、諏訪間佑輔、廣瀬菜穂子、前川順子、山上祐介

■ **TERA English 講師（TERA English のカリキュラム作成、講座運営）**
弘川有希絵、本村桜アリス

■ **主催**
東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人 Ongoing

■ **後援**
三鷹市、武蔵野市

■ **協力**
株式会社リライト、フジクリーニング、旅の本屋のまど、ビリヤード山崎、喫茶上床、グランキオスク、永谷商事、東海大学松前柔道塾、株式会社 まちづくり三鷹、武蔵野タワーズ団地管理組合、UR 都市機構

■ **助成**
公益財団法人全国税理士共栄会文化財団、芸術文化振興基金

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。
https://www.artscouncil-tokyo.jp/

TERATOTERA DOCUMENT 2016

編集：西岡一正
監修：小川希
デザイン：トール至美
写真：Ujin Matsuo、Takafumi Sakanaka、Hako Hosokawa、TERAKKO
発行：平成 29 年 3 月 23 日 アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒 102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階
Tel：03-6256-8435/Fax:03-6256-8829

問合せ
一般社団法人 Ongoing
〒 180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町 1-8-7
Tel/Fax：0422-26-8454
Email：info@teratotera.jp
http://teratotera.jp

TERATOTERA DOCUMENT

2016

ARTS
COUNCIL
TOKYO